月刊もぐら通信

Mole Communication Monthly Magazine

２０２０年１０月１日　第９７号　第二版　www.abekobosplace.blogspot.jp

あなたへ:
迷う事のない迷路を通って
あなただけの番地に届きます

そこでぼくはゆっくりと立ちどまる。空気のバネに押しもどされたように、立ち止まる。左足の爪先から、右足の踵にうつしかけた重心が、また逆流してきて、左の膝のあたりにずっしりと重みをかける。道の勾配がかなり急だからだ。

（『カーブの向う』冒頭　全集第２０巻、１０ページ上段）

『カーブの向う』

目次

０　目次…page ２
１　記録＆ニュース＆掲示板…page ３
２　荒巻義雄詩集『骸骨半島』を読む（１５）：霞論哲学：岩田英哉…page１１１１
３　『周辺飛行』論（１０）：３。『周辺飛行』について（５）：睡眠誘導術—周辺飛行７：岩田英哉…page １６
４　何故安部公房は１９７３年（昭和４８年）に『無名詩集』を巡る対談を自ら企画したか〜『鏡子の家』の絶望と『無名詩集』の絶望〜：岩田英哉…page ２５
５　安部公房　過去のない未来人間：昭和五十二年（１９７７年）『別冊１億人の昭和史　昭和文学作家史　二葉亭四迷から五木寛之まで　芥川賞・直木賞受賞作家全名鑑』毎日新聞社刊…page ４０
６　哲学の問題１０１：性交（sex）：岩田英哉…page ４６
７　リルケの『オルフェウスへのソネット』を読む（４０）：第２部 XV：”おお、泉の口よ、お前与える者よ、お前、尽きることなく”：岩田英哉…page ５４
８　編集後記…page ６０
９　次号予告…page ６０

・連載物・単発物次回以降予定一覧…page ５７
・本誌の主な献呈送付先…page６１
・本誌の収蔵機関…page ６１
・編集方針…page ６１

PDFの検索フィールドにページ数を入力して検索すると、恰もスバル運動具店で買ったジャンプ・シューズを履いたかのように、あなたは『密会』の主人公となって、そのページにジャンプします。そこであなたが迷い込んで見るのはカーニヴァルの前夜祭。

ニュース＆記録＆掲示板

The best tweets 10 of the month

今月の安部ねりに金賞を授ける。さすが、これぞ安部公房の読者、否、毒者である。ねりさんも腹を抱へて今頃笑つてゐるだらう。AKB４８が霞んで銀賞になつてしまつた。

はさまる@hasamarhythm Feb 12
安部公房って1948年デビューなんだ、略すとAKB48だね

今月の安部ねり

畾留@JeyaratnamW Feb 13

悪評を知りつつ、安部公房ファンの女性がわざわざ受診しに行ったこともあるらしい。感想は「お父上の不条理・シュールな作品の中に紛れ込んでしまったような体験で大変満足です。ここは病院ではなく一種のテーマパーク、アトラクションですね」。

レス No.91 期待を裏切らないさん ♀ 20代 2015/10/01 20:57

表参道レディスクリニック (レス)
ここの先生のお父上(有名作家です)のファンです。
ピルを飲むにあたって、どこでもらっても貰うものは同じだし、と思いましてせっかくなので
ここに来てみることにしました。

既に数名の方が指摘されている通り、「ピルを飲んでいると死ぬ」という持論をお持ちなの
に、その毒薬を処方してくださいます。そして矢継ぎ早に人格否定。
要するに周りの人間はバカで自分だけが偉いと思いたい方なんですが、そのバカが来てく
れるから医者はえばれるんですよ〜^^

お父上の不条理・シュールな作品の中に紛れ込んでしまったような体験で大変満足です。
ここは病院ではなく一種のテーマパーク、アトラクションですね。

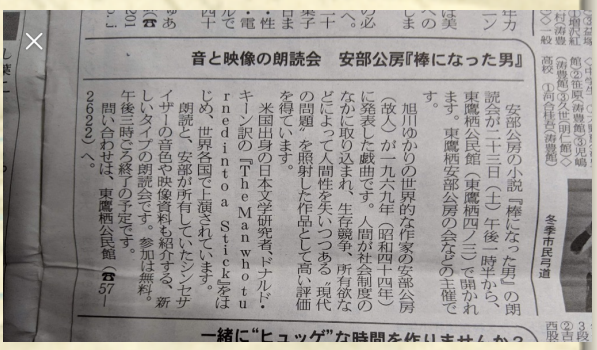
今の気持ち \(◕∀◕)/ 楽しい

レス 11

今月の旭川東鷹栖安部公房の会の朗読会『棒になった男』

柴田望@NOGUCHIS7 Feb 16

人間の在り方や社会全体の在り方について、ユーモラスな表現で様々な角度から考えさせられる重要な作品。世界各国でいまも上演されている戯曲です。 安部公房が所有していたシンセサイザーの音源とイメージ動画を用いて実験的な空間の創造を試みます。ぜひ当日会場へお越しくださいましたら幸いです。



音と映像の朗読会　安部公房『棒になった男』

安部公房の小説『棒になった男』の朗読会が二三日（土）午後一時半から、東鷹栖公民館（東鷹栖四ノ三）で開かれます。東鷹栖安部公房の会などの主催です。

旭川ゆかりの世界的な作家の安部公房（故人）が一九六九年（昭和四十四年）に発表した戯曲です。人間が社会制度のなかに取り込まれ、生存競争、所有欲などによって人間性を失いつつある〝現代の問題〟を照射した作品として高い評価を得ています。

米国出身の日本文学研究者、ドナルド・キーン訳の『The Man who turned into a Stick』をはじめ、世界各国で上演されています。

朗読と、安部が所有していたシンセサイザーの音や映像資料も紹介する、新しいタイプの朗読会です。参加は無料。

午後三時ごろ終了の予定です。

問い合わせは、東鷹栖公民館（☎57―2622）へ。

冬季市民与道

一緒に"ヒュッゲ"な時間を作りませんか？

柴田望@NOGUCHIS7 Feb 16

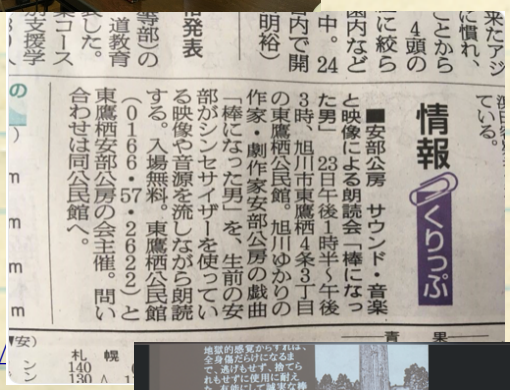
・・・この放送は１０回くらい、再放送されるとのこと、誠に恐縮です。　２月２３日（土）13:30～東鷹栖公民館にて朗読会（主催：東鷹栖公民館・東鷹栖安部公房の会）を行います、作品「棒になった男」。無機物と有機物、命のあるものとそうでないものとの境界とは何か、

柴田望@NOGUCHIS7 Feb 16

■本日２月１６日（土）お昼１２時より、
旭川ケーブルテレビポテトさん生放送
【イベントカレンダー】に出演させて戴き、
「東鷹栖安部公房の会」の取り組みについて、
お話させて戴きました。　渡邊有彩さんと
１５分間のトーク・・・

柴田望@NOGUCHIS7 Feb 12

■本日2月13日（水）の朝日新聞（道内29面）
「情報くりっぷ」にて、《安部公房～サウンド・音楽と映像による朗読会「棒になった男」》
ご紹介を戴いております。誠に、ありがとうございます。
■朗読会、NHK北海道テレビにて告知されました。

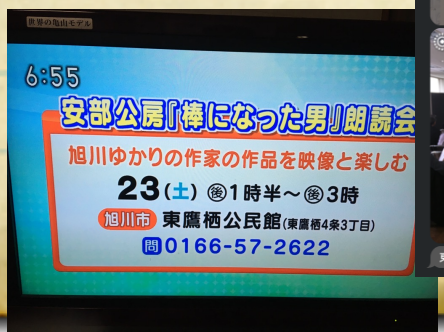


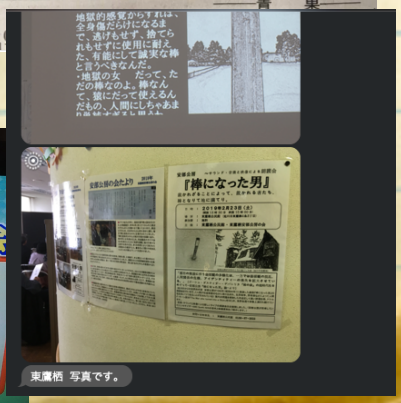
情報くりっぷ

■安部公房　サウンド・音楽と映像による朗読会「棒になった男」23日午後1時半～午後3時、旭川市東鷹栖4条3丁目の東鷹栖公民館。旭川ゆかりの作家・劇作家安部公房の戯曲「棒になった男」を、生前の安部がシンセサイザーを使っている映像や音源を流しながら朗読する。入場無料。東鷹栖公民館（0166・57・2622）と東鷹栖安部公房の会主催。問い合わせは同公民館へ。

ブログ「棒になった男」朗読会のレポート：
https://fragile-seiga.hatenablog.com/entry/2019/02/24/

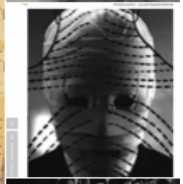
YOUTUBEに当日の朗読会の様子を：
https://youtu.be/ZlVDZTgNxgY





今月の他人の顔

セメントTHING 시멘트@cement_thing Feb 15



ヴェーラで勅使河原宏『他人の顔』。
あの構成の話をどう映画化するんだよと思っていたら、自作をすっきり整理した安部公房の脚本と、フランジュみたいな怪奇趣味めいたビジュアルでなかなか上手いことやっており、映画化としてはこれは成功の部類だなあと思いました。
武満徹の「ワルツ」が最高にいい。

今月の人間そっくり初版

ヒロ@Pocky1123 Feb 13

安部公房『人間そっくり』初版（昭和42年）です。トポロジーの概念を文学に取り入れた趣の作品。火星人と名乗る男と会話していくうちに、だんだんと自我を蝕まれていく「私」が最終的にたどり着く結末。軽妙な語り口の読みやすい文章とは裏腹に現代人の自我の不確かさを鋭く突くギャップが堪りません。

今月のボリス・ヴィアン

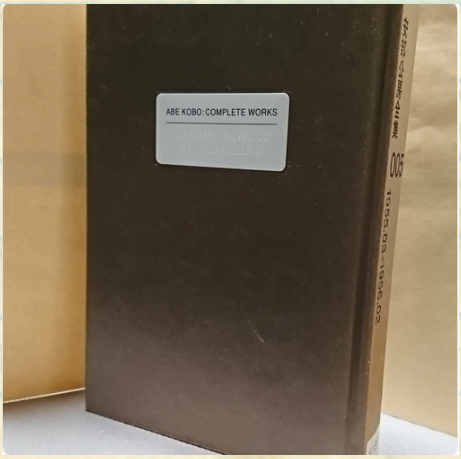
古義人@lgSXsNInYb17T1M Feb 13

買った。
ちなみにこれも安部公房ファン必読の書である。
なんたって安部公房が解説を書いている貴重な作品だから。

今月の安部公房全集第５巻

ilanda Gerr@MilandaGerr Feb 11

【読みかけ】『安部公房全集5[1955.3-1956.2]』 https://milandagerr.comingup.mixh.jp/wp/?p=17421



今月の新潮文庫

山中剛史@ymnktakeshi Feb 9

新潮文庫の安部公房、大江健三郎、刷でテクストが一部改訂されたりすることがあると編集者から聞いたり前にツイッタで見たりしたが、おそらく誰も調べないだろうなあ。

今月の上演『時の崖』

森崎正弘(MousePiece-ree)@mousep3 Feb 16

【森崎正弘、今後の予定】

若だんさんと御いんきょさん『時の崖』

作:安部公房、演出:田村哲男

公演日４月

19日（金）15:00/19:30

20日（土）11:00 / 15:00

21日（日）11:00 / 16:00

会場

studio seedbox

京都駅八条口から徒歩7分

詳細

https://waka5inkyo.blogspot.com/

なんと一人芝居です！

今月の上演２『密会ーRebuild』

ホッタタカシ@t_hotta Feb 6

5月に大阪で上演されるこの舞台、「元々は安部公房の『密会』を土台に、深川通り魔殺人事件を題材にした作品」だそうですが、それをさらに再構築したものなんだとか。

https://hakoniwagekijou.wixsite.com/mikkai-rebuild

今月のヤマザキマリ

ヤマザキマリ(Mari Yamazaki) 公式 情報用アカウント@THERMARI1 Feb 6

『男子観察録』（「マスラオ礼賛」改題）本日発売です。観察対象登場人物：ハドリアヌス/十八代目中村勘三郎/安部公房/ノッポさん/ガリンシャ/ボッティチェリ/空海/奥村勝彦編集長/ゲバラ/水木しげる/トム/スティーブ・ジョブズ/山下達郎/デルス・ウザーラ/等

総勢26、7、8名

今月の安部公房対談

自家製麺キリンジ [redacted] 仙台 北四番丁 ラーメン@ramen_after_all Feb 12

YouTubeアナリクスから見える安部公房の存在感(笑)

今月の箱男

ズムズム@zmzmomomomo Feb 11
文アルに安部公房実装したら段ボール被ってくるよなあ

akashi Kakishima@kakishima Feb 10
散々迷ったけど、安部公房好きとしてはコレをゲット。

今月の笑う月

ともぴ@fAxAb5WtIJFFSki Feb 12
笑う月
安部公房は小学生の頃月に追いかけられる夢に恐怖したらしい。直径1m半程のオレンジ色の満月。その笑顔が不気味だったという。何故?　覚醒時の言葉（因果関係）に影響されるものなのだろうか。
寝る前にテープレコーダーを設置したと言うが、夢の生け捕りは難しい。捕れたら捕れたで怖い…

今月の哀れなる安部公房理解不能者

博同好会幹事@189ASAMA_N102 Feb 12
フォローすんじゃねえメンヘラ後藤
安部公房なんてジイさん聞いたことねえ
からおとといきやがれ

今月の近代文学ゼミの安部公房

hiroshi@nishitaya Feb 9

『第二期富大比較文学』2(富山大学人文学部近代文学ゼミ2019/2)は湊かなえ・高殿円・尾崎一雄・萩原朔太郎・山内マリコ・村山早紀・菊池寛・中原淳一・小川洋子・安部公房・筒井康隆・澁澤龍彦の13本の論考。個人的には太田・岡村・作田・中田・村上・山口・山本各氏の論が面白かった。御学恩に深謝。

今月の石川淳

日本オペラの新たな金字塔!西村朗《紫苑物語》開幕

http://ticket-news.pia.jp/pia/news.do?newsCd=201902180006

《紫苑物語》は、今シーズンから新国立劇場オペラ 芸術監督に就任した大野和士の肝入り企画「日本人 作曲家委嘱シリーズ 」の第1弾。石川淳の同名小説を 原作に、佐々木幹郎が台本を、笈田ヨシが演出を手がけた。芸術監督として初めて指揮するこの作品を、大野は「日本オペラの革命」 と公言している。

新国立劇場オペラ「紫苑物語」 撮影：寺司正彦　提供：新国立劇場

追悼ドナルド・キーンさん

享年96歳 日本文学研究者、翻訳で国際化に貢献

日本文学の国際化に貢献した文化勲章受章者で米 コロンビア大名誉教授のドナルド・キーンさんが24 日、心不全のため東京都内の病院で死去したことが 分かった。96歳。通夜・葬儀の日程は未定。お別れの会を後日開く。喪主は養子のキーン誠己(せい き)さん。：

https://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20190224-00000008-mai-soci

ドナルド・キーンさん＝東京都北区で2014年10月21日、宮間俊樹撮影

［編集部］

キーンさんには、もぐら通信を毎号コロンビア大学の東アジア図書館に送付、収蔵して戴いてをりました。生前のご厚誼に感謝申し上げ、ご冥福をお祈り致します。

ヤマザキマリ(Mari Yamazaki) 公式 情報用アカウント@THERMARI1 2 hours ago
中断しているこの漫画の主人公は、いろいろ違うのだけど、実はキーンさんをモデルにしているのだった。
（そのうち必ず再開します、舞台が日本イタリアどちらも考証・考察に膨大な集中力を掛けなければならない時代の作品なので、中途半端に続けられずそれで中断。どこかで一段落したら必ず）

ヤマザキマリ(Mari Yamazaki) 公式 情報用アカウント@THERMARI 11 hours ago
そしてキーンさんのマリア・カラス好きもそのまま表現。（や）

ヤマザキマリ(Mari Yamazaki) 公式 情報用アカウント@THERMARI1 11 hours ago
キーンさんをモデルにした「ジャコモ・フォスカリ」で描いたこのシーンは安部公房との対談集「反劇的人間」のあとがきにあった本当にあった話。
安部公房がキーンさんに日本酒のソーダ割を飲ませて薬物依存症かどうかを実験したというシーン。どんどん再開したくなってきた…（が当分は難しい）・や

荒巻義雄詩集『骸骨半島』を読む
（１５）
霞論哲学

岩田英哉

暗闇の部屋にも……
　イデアの光が差し込むと考えるのは虚妄である。
　　一切の感覚すらも……
　　遮断された闇の中に目覚めたわれ……

　　父母未生以前本来の面目

　　彼らの同化し得なかった絶対の虚無にも
　　おぞましく受け入れがたき虚無の深淵にも
　動ずることなくわれらは溶解するのだ。

　　故無有恐怖

　不幸の始まりは二項対立
　対自は即自に対峙しない。
　　虚はなし
　　無もなし
　　虚無なく
　　空無はある。

存在を包むものは虚無
存在を消し去るものが空無

――との認識に立ちて怖れなし
　　空無と添い寝しつつわれら霞となりて

　　拡散するもの――それが存在
　　滲むもの――――それが存在

　　色即是空
　　空即是色

哲学するとは超観することであり、分析することではない。

彼らはどこでまちがえたか？
光と影は分離しない。

光は影
影は光
色不異空
空不異色

＊＊＊

一体この詩は何を歌つてゐるのか、そして霞論とは何か、この論で成り立つ哲学とはどのやうな哲学であるのか。といふ問ひが生まれるところから見ると、それは、前回の『樵の哲学』とは正反対に、この詩を論ずる文章は散文的なものになるといふことを意味してゐる。

霞とは隠喩（メタファ）である。霞とは何かといふ問を立てて、この詩の中に類義語を探すと次のやうな言葉がある。

（1）第三連：「動ずることなくわれらは溶解するのだ。」
（2）第八連：「拡散するもの――それが存在」
（3）第八連：「滲むもの――――それが存在」

溶解するのは液体であり、霞ではないが、霞は霧のごとくあるものと考へれば、連想は繋がるのではないかと思ふ。そして霞は拡散し、滲む。即ち、霞は存在である。

しかし、この霞とは、更に、一体何なのだ・と問へば、それは第７連にあるやうに、

「空無と添い寝しつつわれら霞となりて」

とあるやうに、霞とは「空無と添い寝しつつ」「霞とな」る「われら」である。それでは、更に再度、「われら」とは何かと問へば、第五連によつて、

「不幸の始まり」である「二項対立」を超越するものが、「われら」と呼ばれる一人称複数形の人間たちの集合である。これに対して「彼ら」と呼ばれる人間たちがゐて、「彼ら」は二項対立を否定せずに、といふことであれば肯定して生きる人間たちである。

「彼ら」は帝国主義者、「われら」は、超越者である。

二項対立は常に例外なく時間の中で、現存在としてある人間に迫られる、相反する選択肢

である。それは「絶対の虚無」と「虚無の深淵」を彼らにみせ、そこに導かうとするが、しかし、われらは「彼らの同化しなかった絶対の虚無にも」、彼らが「おぞましく」感じて「受け入れがた」いと思つた「虚無の深淵」に対しても、われらは二項対立を超えてゐるので「動ずることなく」、それら「絶対の虚無」と「虚無の深淵」にも「溶解する」ことができる。

この絶対の虚無と虚無の深淵は二項対立の対立項の間にあるといふことであらう。

われらが絶対の虚無とその深淵の溶解して無となるが故に、恐怖が有るといふ論理は、彼らの論理であり、霞論ではない。何故ならば、二項対立を越えれば、「対自」と「即自」は「対峙しない」ので、対立の隙間の深淵に、虚はなく、無もなく、従ひ虚無もないからであり、他方これに対して同じ無であつても空無は存在とともに次のやうにあるからだ。

「存在を包むものは虚無
　存在を消し去るものが空無」

即ち、存在を消し去るものが空無であるので、「空無はある」といふし、いへる。拡散して滲むものは、それによつて存在を消し去るものであり、それが空無である。空無は拡散し、滲むものだといふのが、霞論の哲学といふことになる。

この霞論が成り立つのは、「空無と添い寝しつつ」「霞となる」「われら」となり、そのやうに/な「われら」である場合である。

ここで最初に論じた『世界接触部品』の最後の連の霞論を引用しよう。

「われらは定住者の帝国主義者ではない
　われらは世界を横断する者
　熟語の駿馬にまたがる主語は　境界面を浸透する」

熟語の駿馬にまたがる主語は　「空無と添い寝しつつ」境界面を浸透するといふことになる。

『タイムズ・スープ』に次の霞論が記述されてゐる。

「霧の彼方……
　神話の故郷（くに）……
　われらは向かっているのではない
　遠ざかっているのだ。
　岸を離れた帆掛け舟のように

　やがて彼方に陸は没し
　やがて記憶も薄れ
　船出した港までも忘却される。」

これは、「熟語の駿馬にまたがる主語」が、帝国主義者の定住の論理と全く正反対に、遠ざかることが、「空無と添い寝しつつ」境界面を浸透するといふことになるのだ。何故ならば、「存在を包むものは虚無/存在を消し去るものが空無」であるから。

まだ未見未論の『表徴の帝国よりあなたへ』に次の霞論がある。

「主語なき他動詞
　左様――不在の主語こそが、
　私たちの神
　不在ゆえに超越的な……
　この国では
　超越者は霞のように在り……
　我は霧のように在る……」

『終りし道の標べに』で２３歳の安部公房の霞論は次のやうに冒頭に第二節に書かれてゐるのを読むことは悪くない。

「霧に包まれた道を歩きながら、疲れ切った心の中で、今や最後の灯影がちらついえ消えて行くのを、あのまがりくねった粘土塀の終る所にしばらくやすめて見た。
　粘土塀……霧の中で重い乳色に身をすりよせて、追憶にまぎれ忘れられた崩壊……あの寂寥にはふさわしい氷雪の原が、何処からともなく去来する視野に、時折過去の、或いは未来の、赤裸々な調律をのせて送りとどける。
　更に私は粘土の壁と門とを見た。と、ただ潜入と忘却だけが創りあげうる自我の輪郭に依存して、この形象を表現し断言する必要があっただろうか。もう自己を断言することさえ出来ないのに。」

粘土塀の迷路から脱出する道を触覚によつて辿る主人公の自我は、やはり「もう自己を断言すること」ができない。何故なら、この詩人の言葉でいへば、この主人公は帝国主義者ではなく、超越者であり、私たち安部公房の読者に親しい言葉でいへば越境者だからです。

かくして、二項対立は超越されて、「色即是空/空即色是」となり、従ひ、これが超観といふものであり、哲学するとはこれであつて、「分析することではない。」

「彼らはどこでまちがえたか？」何故なら「光と影は分離しない」ものを分離して分析したから。「故無有恐怖」。無なる故に、恐怖有り。存在を包む空無ではなく、対立の深淵

たる絶対虚無を求めるからだ。その我は拡散し滲む存在、それこそが「父母未生以前本来面目」ではないのか。さうであれば、時間前後は消滅し、超越的に境界の越境者として「熟語の駿馬にまたがる主語は　境界面を浸透する」ことができるから。浸透するのは液体の隠喩（メタファ）である。

従ひ、生まれる以前のその胎内といふ部屋の闇に「イデアの光が差し込むと考えるのは虚妄である。」何故なら、二項対立は次のやうに存在せぬからだ。

「光は影
　影は光
　色不異空
　空不異色」

これが「一切の感覚すらも……/　遮断された闇の中に目覚めたわれ……」なり。

液体化した時間は汎神論的に遍在するので、時間は消滅するといふのは、首尾一貫した、この詩人の主題であり、根源的な存在の形象（イメージ）であり、たとへそれが表に出なくとも常に通底してゐる動機（モチーフ）です。

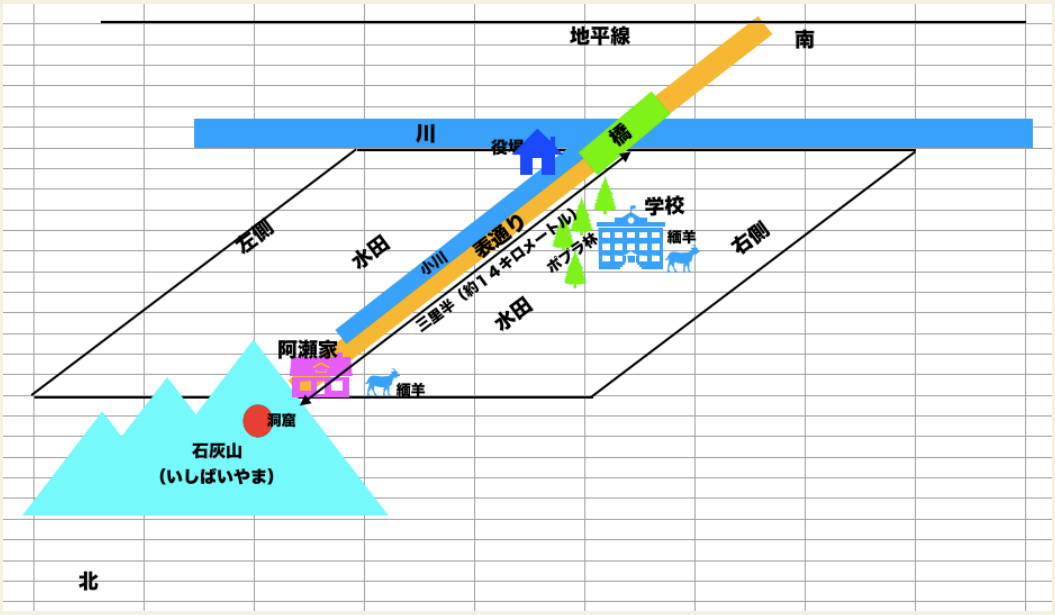
『周辺飛行』論
（１０）
３。『周辺飛行』について（５）
「睡眠誘導術—周辺飛行７」

岩田英哉

「　眠られぬ夜のために、一つとっておきの睡眠誘導術を伝授するとしよう。」

といふこの一行で始まる周辺飛行は、この催眠誘導術を伝授される読者が伝授されたいと思つた瞬間に、実は安部公房の読者が小説の最初の数行を読むといつの間にか其の世界の中に生理的な感覚の実感とともに吸い込まれてしまつてゐるやうに、既に催眠効果が効いてゐて、かうして引き写してゐる此の私も「既にして」眠りの中に誘導されてゐて、夢の中で此の催眠誘導術に関する周辺飛行論を書いてゐるのかもしれないのです。

安部公房の教へる睡眠術は、実は『鏡と呼子』の舞台設定と全く同じで、「まず、アメリカの西部劇に出てくる、なるべくありふれた場面を思い浮かべていただきたい。」この舞台を思ひ描いて、『鏡と呼子』の町の平面をアメリカ大陸の西部劇に出てくる大平原だと思ひ、「さて、その大平原を横切っている一本の白い道。やがて道は高い断崖にはばまれ、深い割れ目に吸い込まれる。」役場や学校や阿瀬家やその他のものは皆ないものと考へてください。単純な平面と、手前にある石灰山が「高い断崖」であつて、この断崖には「深い割目」がある。あなたは「名だたる弓の名手」であるインディアンになつて、この「高い断崖」の上に陣取り、山に向かつて一直線の道を縦列を組んで馬に乗つて走つて来る「例の制服に身をかためた騎兵の一隊」を、そして此の一隊が断崖の割れ目に駆け込む前に全員を、この崖の上から一人また一人と弓矢を番（つが）へて射殺するのである。



何故崖の割目かといふと、、垂直に立つ崖と其処に凹（へこ）みとしてある此の窪みは、安部公房の読者お馴染みの存在の形象であつて、ここに存在が宿ることになるからです。といふ事はあなたの使命は騎兵隊の一列を存在の中へと入れない事である。夢の中で存在になりたい者を殺してならぬやうにすれば、現実の自分は入眠できるといふのが、安部公房の理屈である。さて、存在に関係するならば、このエッセイに呪文があるのだらうかとおもつて繰り返しの言葉を探すと、あるのです。

あなたが身を潜める断崖の上の「天頂には、浜辺に打ち上げられたクラゲのように、ぷるぷるふるえている白い太陽、はためく風は、透明な大天幕だ。」

と、おまけにいつもならば話の結末に来るはずの透明感覚が最初に来てゐる。といふ事は、これが既に話の終りであることを示してゐる。この睡眠誘導術の話は終りから、即ち既に催眠してゐるところから始まつてゐるて、冒頭私が心配したやうに、私もまた此の文章を催眠術にかかつた結果として書いてゐるのである。とすれば、私は早や「終りし道の標べに」立つてゐるといふことになる。さうであれば、私はこれから先、「墓と手を結んだ生誕の事を書かねばならぬ」のであらう。

しかし、よく考へてみれば、人を次から次と弓矢であらうと、二つ目に使用されるライフルであらうと、人を殺して、一人二人と勘定して行けば眠りに至るといふのはどう考へても、普通ではない。あなたは人を殺した人数を数へながら安らかに眠りに入ることができるだらうか。しかも、「胸をおさえ、ネッカチーフをひきむしりながら、映画の場面そっくりに落馬していく白人の兵士」の姿を想像しながらである。とはいへ、とにかく安部公房はこれで睡眠できるといふのであるから、嘘か誠か、まづは安部公房を信用して、さうだといふことにしよう。

ところが、それでも尚、眠れなくなる事態が出来（しゆつたい）した。それは、狙つて構へた矢の先端がある時くるりと曲がつて自分の方を向いたのである。そこでライフルに替へてみたが、これもしばらくすると銃砲の先が「ぐにゃりと曲がってこちらを向いてしまったのである。」

この二つの場合が何故いけないかの理由をいふために安部公房（といはうか、話者）の持ち出す理由が、自分は先端恐怖症であるといふ理由です。しかし、その後に書いてある先端恐怖症といふ病気発生防止法が「先端のない球形の武器」の発明であるといふのであれば、それは理屈としては武器が球形をしてゐれば、球形が「ぐにゃりと曲がってこちらを向いてしまった」などといふ事は確かにないであらう。こんな武器ならば問題なしといふ理由が、先端の曲がらぬ図形といふ事なのであれば、むしろいふべきは、先端の有ることを無くするがために、こんなありえないやうな球が先端についてゐる武器などといふものを考案したのではないかとまで思ひたくなる位です。最初から球形の先端といふ解決策を考案するといふのであれば、先端が面であつても、やはりセルロイドの下敷きをU字型に曲げることできませうから、これも「ぐにゃりと曲がってこちらを向いてしまった」となるものだと最初から考へてゐるのでせう。といふわけで、立体、それも球形ならば大丈夫といふ結論なのでせう。立体でも球形以

外の立体、たとへば、安部公房の箱であれば、やはり「ぐにゃりと曲がってこちらを向いてしまった」といふ事は箱の形状によつてはあり得る事は想像がつきますから、『箱男』を読んでゐて、箱男の箱が少し縦に長ければ、「ぐにゃりと曲がってこちらを向いてしまった」などといふ場面もあり得たのかも知れません。要するに端があつてはいけないのです。

さて、ここから後の文章の内容は、上の段のやうな理由で、最後の一行「ぼくが球形の武器の開発にさほどこだわらないのも、それなりの理由があるのである。」に至るまでの、何故球形の武器の開発がそれほど急務ではないかといふ理由の説明になつてゐる。そして、ここからが、いよいよ本番で、即ち安部公房固有の話法たる「僕の中の「僕」」の登場による［註１］、話中話、劇中劇、エッセイ中エッセイといふ、舞台劇の中での更なる劇の始まり、入籠構造になつた物語の始まりといふことになるのです。安部公房の作品は三層構造になつてゐるのでした。しかし、この「周辺飛行」の連載にあつては、これは小説ではないといふ理由でありませう、地下に降りて行く話の場合には、三階層ではなく二階層になつてゐるのが、これまでのエッセイの例でしたので（例へば鶏料理を出す地下二階のレストラン）、ここから先も二階層に深化は止まるのではないかと思はれる。といふ目で、この話中話を読み進めると、間違ひなく、垂直方向に二階層の深化はあるが、それ以上主人公または主人公たる話者の意識は地下には降りては行かず、そこまで行くと話は元の地上の（といふべきでありませう）最初の出発地点に戻つて来るのです。この話中の話の発端は次のやうに始まります。即ち、これが「僕の中の「僕」」の話法の始まりなのです。即ち前者の僕が地上から地下に降りて行き、後者の「僕」の経験する悪夢の話に「切れ目」なく切り替はる物語の連続の中を地獄巡りするのです。いや、物語は「切れ目」を以つて切り替はるのです。この「切れ目」が何か、どこにあるのかを読み取つて下さい。いつもの安部公房の作品の冒頭にそつくりな「冒頭そつくり」の以下出だしです。

「　その時ぼくは旅先で、ホテルのロビーで誰かを待っていた。電話の呼び出しがあり、客が都合で１時間遅れると告げてきた。ぼくは部屋に戻って、服のまま横になり、例の睡眠誘導術でうたた寝をすることにした。そして夢をみた。」

「グレゴール・ザムザが或る朝不安な幾つもの夢から（夢の内部から外部へと）覚めると、自分の寝床（ベッド）の中で一匹の巨大な毒虫になつてゐる自分を発見した。」（拙訳）

［註１］
「僕の中の「僕」」といふ安部公房固有の話法については『デンドロカカリヤ論（後篇）』（もぐら通信第５６号）をお読みください。詳述しました。

この有名な、後年安部公房が自分の水先案内人とまで後年呼ぶカフカの有名な短編小説の出だしは、主人公の目覚めは定時定刻ではなく、或る朝であり、夢の内部から外部へと出てきて目覚めた筈の自分の姿が、夢の中の、それも現実の中の巨大な毒虫であつたといふ出だしに、上の出だしもよく似てゐます。一言でいふと、時間論としての超越論です。即ち、

（１）「客が都合で１時間遅れると告げてきた」といふ其の当の定時定刻は不明、
（２）その不明の定時定刻に対して、１時間の遅刻といふ時間的な遅延が生じてゐる。さうして、
（３）戯曲『友達』の電話や小説『砂の女』のラジオのやうに、リルケの『オルフェウスへのソネット』を読んで知つた私たちは、このやうな遠隔地や遠隔者との通信機器は、遥かな距離の値を０にし、従ひ通信の時間を０にするための手段であること、即ち空間的差異と時間的差異を0にして其の場所（凹）を存在の場所とするための手段だといふことを知つてゐます。といふ事は、この電話を受けた時から話者の地獄巡りの旅が始まるといふことになり、実際に話は其の通りの話になつてゐます。

この話は、１時間の遅延といふ時間的差異の中で、また遅延といふ差異によつて語られる超越論の存在の、これも空間的な差異、即ち隙間といふ連続と非連続にあつて起きるtopologicalな（位相幾何学の）悪夢の物語といふことです。かういふ設定であつてこそ、安部公房の想像力は活発に働く。

この主人公たる話者の「僕の中の「僕」」の恐怖の原因は、夢の中で見る夢と夢の間に隙間がない、文中の言葉でいふと「切れ目」がない、といふことです。即ち、夢が連続してゐて、どこまで逃げても、あのエッセイ『笑う月』の「花王石鹸の三日月」みたいな、しかし其の顔を「多少あぶらぎらせたような顔つきで、頭いちめん、小指の先ほどのカサブタが群生してゐる」「カサブタだらけの小人」が追いかけて来ることになるといふこと、これが恐怖の原因なのです。

夢から覚めようとして「走りながら、手の甲の皮を抓ってみる」が、「やはり夢だ、ぜんぜん痛くない。しかしまだ安心できないので、もう一度抓りなおしてみる。つまんだ手の甲の皮を、思いきり引き伸ばしてみる。皮はゴムまりのように、二十センチ以上も伸び、痛くも痒くもない。」

到頭、「墜落の夢はかならず覚醒につながつている」といふ「誰でも覚えのある」方法を使つて目を覚まさうと、「夢なのだから、死ぬ気遣いはない」とばかりに、橋の上から下の「水の涸れた河原」目掛けて飛び降りてみる。飛び降りる前に「もう一度手の甲を抓ってみ」るが、落ちた後も「ところが、どうしたことか、それでもまだ、覚めてくれないのだ。」

興味深い事は、最初の夢の手の甲を抓って「甲の皮を、思いきり引き伸ばしてみる」と「皮はゴムまりのように、二十センチ以上も伸びた」とあるやうに、これは「周辺飛行５」でも言及し、また「周辺飛行１５ーゴム人間のことなど」で詳述するやうに、空間的なもの同士の隙間といふ接続を人間が知る形象（イメージ）としてゴム鞠があり、この言つてみれば、ゴムまり練習と言はうか、ゴムまり人間ゲームと言はうか、要するに此のゴムまりを使つて、安部公房は安部公房スタジオの若い俳優たちに此のtopologyによる接続と非接続、連続と非連続の、日常的な論理上はあり得ない二項対立の否定による其の超越論を生理的に体感し、体得

して、これをそのまま舞台に生かすことができるやうにと念じて、此のゴムまり人間ゲームを演技指導したといふことになります。要するに球体のゴムまり人間に端はないのです。

このゴムまりゲームと云ふ演技指導の中核概念は勿論、云ふまでもなく、ニュートラルです［註２］。

この隙間をゴムまりを共有して生理的に体感体得することで、topologicalに身体ごとA+B＝K（定数）を、AxB=K'と云ふ、即ち日常の連続性に生きる二人の役者のK（定数）と云ふ和算と引き算の値の関係を、どうやつて、非日常といふ不連続を同時に体現できるK'と云ふ積算値たる「Kそつくり」、「人間そつくり」「役者そつくり」に如何様にでも臨機応変に変身可能にするニュートラルたる存在と化すかといふ理論と実践については、初期安部公房論で既述の通りであり［註３］、また其の他この後の「周辺飛行１６ー意味もなく視線を中におよがせる」および「周辺飛行１７ーニュートラルなもの」なども同時に引用しつつ、「周辺飛行１５ーゴム人間のことなど」で詳細に論じたい。

［註２］
『安部公房の初期作品に頻出する「転身」といふ語について （４）』（もぐら通信第５９号）の「VI 「転身」といふ語は、詩文散文統合後に、どのやうに変形したか(「3散文の世界で の問題下降」後の小説)」をご覧ください。詳述して此の概念と、此の概念の応用たる安部公房スタジオの演技指導論の核心を明らかにしました。

［註３］
初期安部公房論は『安部公房の初期作品に頻出する「転身」といふ語について 』と題してもぐ通信第５６号から第５９号までに詳細に論じました。ちなみに今その中から第５６号より初期安部公房の定義を以下に引きます：

「初期安部公房の定義

『安部公房の初期作品に頻出する「転身」といふ語について』といふ題でお話を致しますが、ここでいふ安部公房文学の「初期」といふ言葉の定義について最初に簡単に説明をして読者のご理解を得てから本題に入ります。

この場合の「初期」とは、既に「『デンドロカカリヤ』論（前篇）」（もぐら通信第５３号）にて明らかに致しました「詩人から小説家へ、しかし詩人のままに」のチャート図に基づいて定義をすると、次のやうになります。

１。狭義には、３つの問題下降の時期、即ち詩人から小説家への変身に３回の問題下降によつて美事に成功する時期、即ち全集によれば詩集『没我の地平』を著した西暦１９４６年（昭和２１年）安部公房２２歳から『デンドロカカリヤB』 ［註１］を著した西暦１９５２年（昭和２７年）安部公房２８歳までの期間を言ひ、

２。広義には、３つの問題下降以前の時期、即ち西暦１９４２年（昭和１７年）安部公房１８歳から西暦１９４４年（昭和１９年）安部公房２０歳までの問題下降論確立の時期及び、西暦１９４５年（昭和２０年）安部公房２１歳までの１年間を含んだ時期を併せた全体の時間を言ひます。

［註１］
「『デンドロカカリヤ』には二種類あります。一つは、全集によれば「雑誌「表現」版」と呼ばれてゐるもの、もう一つは、「書肆ユリイカ版」と呼ばれてゐるもの、この二つです。便宜上、前者を『デンドロカカリヤA』と呼び、後者を『デンドロカカリヤB』と呼ぶことにします。前者の発行は１９４８年８月１日、安部公房２５

歳の時、後者の発行は１９５２年１２月３１日、安部公房２８歳の時です。この二つの作品の間に、『S・カルマ氏の犯罪』で芥川賞を受賞してゐます。」（「『デンドロカカリヤ』論（前篇）」もぐら通信第５３号）」

日常的な論理上はあり得ない二項対立の否定による其の超越論とは、日常（連続）と夢（非日常）の連続と非連続であり、現実（連続）と非現実（夢）の連続と非連続であり、夢（日常）と「夢の中の「夢」」（非日常）の連続と非連続であるのです。そして、「僕の中の「僕」」の恐怖の原因は、夢の中で見る夢と夢の間に隙間がない、「夢の中の「夢」」と「僕の中の「僕」」がぴつたりと一致し同期してゐて、後者の「僕」が前者の「夢」から永遠に逃れられない、即ち文中の言葉でいふと「切れ目」がない、、超越論の存在論用語を使へば存在へと脱出する隙間（差異）がないといふことです。　何故なら、自分の身体自体がゴムまりのやうに伸縮自在であるからです。といふ事は逆に、此の「夢の中の「夢」」と「僕の中の「僕」」の同期の一致を不一致にして、そこに遅延を生じさせれば脱出ができるといふことを意味してゐます。この関係を「周辺飛行１５ーゴム人間のことなど」で、安部公房は率直に次のやうに語つてゐる（「睡眠誘導術—周辺飛行７」 全集第２３巻、３９９ページ下段）。

「さいわい一週間前に「箱男」を書き終えたので、今回からあらためてぼく自身の周辺飛行に戻ることにしたい。

　夢のいま一つの特徴は、イメージを紡ぎ出す原動力が、概念よりもはるかに強く生理的なものに負っている点だろう。覚醒時に受けた心理的な刺戟が夢の原因になる事は、ありそうでいて、めったにない。むしろ体に敷き込んだ夜着の裾の圧迫、膀胱の緊張、耳馴れぬ物音、などといった意味のない純然たる生理的な刺戟が夢を誘発し、筋や方向を与えることが多いのだ。どんなに支離滅裂な夢でも、あたかも現実のように偽体験できるのは、そのイメージが生理的なものに裏付けられているせいなのである。

　たとえば俳優の訓練に際しても、この原理をそっくり応用することが出来る。それは俳優が単なるイメージの伝達者ではなく、イメージ自体であることを求められる存在であるからだ。俳優は夢見る者ではなく、夢見られる者でなければならない。俳優は夢の論理で自立しなければならないのである。俳優の内部構造の研究は、そのまま夢の構造の研究にも通じている。」（傍線引用者）
（「睡眠誘導術—周辺飛行７」 全集第２３巻、３０９ページから３１０ページ上段）

今この「俳優は夢見る者ではなく、夢見られる者でなければならない。」といふ一行を目の当たりにすれば、源氏物語の六条の御息所の逸話をみよ。「紫の上は夢見る者ではなく、夢見られる者でなければならない。」紫の上はこの「夢見られた「夢」」によつて死に至る。といふことは此の「俳優は夢見る者ではなく、夢見られる者でなければならない。」といふ一行は常に死と一緒の裏腹の一行だといふことです。それ故に、安部公房が役者の理想の姿として（箱男のやうに）あなたが窓から覗いてみることのできる死刑執行直前の椅子に座つた男の姿が理想といふ教へのあることが理解できます。此の男も密かに窓から覗き見られることによつて、覗き見る俳優によつて「夢見られる者」となつてゐるが故に死んで行くのだといふの

が、安部公房の教へたかつた論理だといふことになります。

ここまで安部公房の夢と現実の関係、二項対立否定と第三項（存在）定立の関係、見る者と見られる者との関係、夢見る者と夢見られる者との関係、私と「私の中の「私」」の関係、そしてこれら全ての関係に関する連続と非連続の関係を考へると、安部公房の辛辣なる惹句、即ち、

弱者への愛には、いつも殺意がこめられてゐる。

とい警句の意味も、理解が深まるやうに思はれる。即ち、

安部公房の愛とは常に永遠に別離する覚悟を伴ふ愛ですから［註４］、弱者への愛とは、

あなたが弱者を愛する愛と
弱者があなたに愛される愛との

この二つの愛のあることになり、あなたにあつては、もし夢と現（うつつ）の切れ目を見つけることができない場合には、あなたに愛された弱者は、そのことによつて、あなたに殺されるといふことになります。あなたは夢の中で弱者を愛するのか、それとも現（うつつ）の中で愛するのか。

かうしてみると、『密会』の副院長の馬が、良い医者は良い患者といふ時には、馬自身が病院の副院長といふ二次的・二義的な地位にある（即ちtopologicalな場所にゐる）真の支配者として、現実と夢の切れ目の自覚を失つた強者であるからさう思ふのだといふことが判ります。メビウスの環の接続を見失つた副院長の馬の姿です。かうして、

弱者への愛には、いつも殺意がこめられてゐる。

［註４］
この愛が常に別離と一緒に一対であり、「無償の愛と永遠の別離による愛の真実性の証明をするた めの転身の愛」であることは、『安部公房の初期作品に頻出する「転身」といふ語について (3) 』（もぐら通信第５８号）の「Ⅳ 「転身」といふ語のある小説を読む」に、安部公房の存在概念との関係でも詳述しましたので、ご覧ください

さて、本題に戻ると、此のやうに「夢見られる者」のゐる閉鎖空間が死刑囚のゐる部屋であり、これが存在の部屋であり、そして主人公は、それが戯曲の舞台上での役を演ずる俳優であれ小説の中の役を演ずる主人公であれ、この存在の閉鎖空間から脱出を図り、最後に「明日の新聞」に報ぜられながら失踪する、或いは失踪した過去の事実が「明日の新聞」の記事として今日読むあなたに現在の時間の中で報ぜられる此の現在の時間と呼ばれる時間は果たして現実なのか夢なのか、「現実の中の「現実」」なのか、と、さうであれば後者の「現実」は夢に等しいではないか。何故ならそれは構造的に「既にして」（超越論的に）あなたの「僕の中の「僕」」にさうである契機（タイミング）が同期し一致してゐるから。これが「夢の構造の研究」であり「俳優の内部構造の研究」である。

これが古代からずつと本来私たち日本人が常識として来た夢と現実と人間の関係である。大地母神崇拝の心と意識。といふ事は間違ひなく、文字に表した記紀万葉以前の縄文紀元にあつても同様であつたといふことです。シャーマン安部公房の持つ古代性、古代感覚といふものは、かういふ現代の最先端の演技論と演技指導論に生きてゐる。勿論小説にも。といふ事は、私たち読者の文明論的な位置は、２０世紀の安部公房の登場以来どこにあるのかと云へば、夢と人間の現実の隙間（関係）にある此の古代性の恢復を求める事にあるといふ事ですし、海外の世界中の安部公房の読者の求めるものも、アメリカでの安部公房スタジオの公演の成功を思へば、そして安部公房も当時「安部公房スタジオ通信８ーアメリカ公演を終えて」に書いてゐるやうに「気風のちがうアメリカ各地で同じような評価を受けた。と言うことは、アメリカのみではなく、ヨーロッパでも同じような評価を受けるのではないか、といふ自信と期待を抱かせ」たのであれば（全集第２６巻、４０１ページ）、同じ筈ではないかと思つてみれば、これは安部公房が『終りし道の標べに』で苦吟しながら考究した唯一絶対神との戦ひの、国籍、民族、言語を問はぬ、それこそグローバリズム（共産主義）では全くなく此れを全否定した、超越論の共有者たちといふことになつて、その読者が意識するにせよしないにせよ、理解するにせよしないにせよ、なります。

さて、一体夢と夢の切れ目、現実と夢の切れ目、夢かも知れぬ現実と現実かも知れぬ夢の切れ目、この切れ目は一体この「周辺飛行７」のどこにあつた/あるのでせうか？

結局、主人公の話者は、待つ間の睡眠中にみた夢の中にゐる「河原から這い上ると、交通の激しい大通りで、すぐ前が運よく泊まっているホテルだった」ために、客と会ふことができて、約束の履行にことなきを得た。しかしこれが夢の続きでありえることは、「時計を見ると、ちょうど１時間経ってい」たからで、しかし約束の定刻定時の明示はなく、安部公房らしいことに、依然として最後もまた時差といふ遅延の中に主人公の意識は留まってゐるからです。

しかし、客と別れてその日の夜に寝床につくまでのことは、そのままゴムまり人間としての夢の続きの夢想であるのだらうか？「しかし、あれが夢の続きだなどと言うことはありえない。客と話しながら抓った手の甲は、確かに痛かった。どこかに自覚できない切れ目があったにちがいない。」

再度しかし、「メージを紡ぎ出す原動力が、概念よりもはるかに強く生理的なもの」であり、「覚醒時に受けた心理的な刺戟が夢の原因になる事は、ありそうでいて、めったになく」、「むしろ体に敷き込んだ夜着の裾の圧迫、膀胱の緊張、耳馴れぬ物音、などといった意味のない純然たる生理的な刺戟が夢を誘発し、筋や方向を与えることが多いの」だといふ安部公房の主張によれば、一寸位爪で手の甲の皮を抓つて痛いか痛くないかといふ判定では、夢の切れ目は知られ得ない。上の引用を読むと、爪で抓る痛さを感じた時は、「どこかに自覚できない切れ目があったにちがいな」とあるやうに、既に夢を脱した後のことだといふことになるからである。

つまり、今あなたが自分の手の甲を抓つて痛いと思つても、それは既に夢を脱した後のことだ

といふことの「終りし道の標べ」にはなつても、これは既に過去のことであつて、あなたは常に遅延に生きてゐる人間である以上、今ゐるその手の甲の痛さを感じた後の現実が夢ではないといふ保証はどこにもないのです。

かうして、あなたはこれから先も「墓と手を結んだ生誕の事を書かねばならぬ」のです。

あなたの「終りし道の標べ」たる切れ目は、さて、一体、何処にある？

ここまで読んできて此の問ひに即答できないといふのであれば、私は喜んで、眠つてゐるあなたの昼のために（三島由紀夫ならば正午の午睡といふだらう）、私たちの此の夢の中で、一つとつておきの覚醒誘導術を伝授するとしよう。まづ、アメリカの西部劇に出てくる、なるべくありふれた場面を思い浮かべていただきたい……

何故安部公房は
１９７３年（昭和４８年）に『無名詩集』を巡る対談を自ら企画したか
～『鏡子の家』の絶望と『無名詩集』の絶望～

岩田英哉

「『鏡子の家』の中のS・カルマ氏」（もぐら通信第９６号）に深い関係のある出来事なので、同論の続きとして、またその一部として此の論考を以つて補足をしたい。

１９７３年はいふまでもなく、安部公房が『箱男』を発表し、同時に安部公房スタジオの旗揚げを宣言した年です。時系列で事実を並べると次のやうになります。

１。１９７３年1月１２日：「安部公房スタジオ」旗あげ［談話記事］（全集第２３巻、４０２ページ）
２。１９７３年3月３０日：『箱男』刊行（全集第２４巻、９ページ）
３。１９７３年9月1日：『無名詩集』を巡る対談（全集第３０巻、１７４ページ）

それから、安部公房と『無名詩集』の関係を、自筆年譜を初期安部公房論から引用しますのでご覧ください。安部公房の『無名詩集』に対する隠顕の意識のあり方とリルケと自分の詩の世界を表に出さうといふ意識の変化が伺へます。

「I　安部公房の自筆年譜と『形象詩集』の関係について

安部公房全集の第３０巻で検索して、安部公房による自筆年譜を調べますと、次の４つの年譜を安部公房は誌（しる）してゐます。

１。「年譜　『新鋭文学叢書』に寄せて』」（全集第１２巻、４６４ページ）
２。「〈年譜〉『新日本文学全集』に寄せて』」（全集第１８巻、２４４ページ）
３。「〈安部公房年譜〉芥川賞作家シリーズ『おまえにも罪がある』に寄せて」（全集第１９巻、１２８ページ）
４。「略年譜『われらの文学』に寄せて』」（全集第２０巻、９２ページ）

これら４つの年譜を見ますと、皆共通してゐることは、何かの叢書なり、全集なり、シリーズなりに掲載するための、出版社による作家の自己紹介といふ要請に応じて、さういふ意味ではまた積極的にではなく、安部公房らしいことに消極的に、即ち平俗な言葉を使へば嫌々、書いた自筆年譜であることが判ります。

特に２の年譜の冒頭には、一種の断り書きが書いてあつて、作家の本当の経歴は外部の歴史的な時間の中の事実の羅列にあるのではなく、作家である以上それは内部の経歴といふものがあつて、

それが作品といふものであり、作品を読んでもらふ以外には私といふ作家を知る道筋はないのだが、「しかし出版社のたっての希望により、以下私を知るためにはいささかも役立ちえないだろう伝記をあえて書くことにする。」と、この前書きを書いた後に、消極的な理由で、時系列の「外部の経歴」を記述してゐます。

これら４つの年譜を読み、比較して解ることは、次のことです。

（１）３の年譜の文章は、１と２から文章を抽出して来て併せたものだといふこと。そして、
（２）３の年譜には、２の年譜にあつた上記の前書きはなくなり、代わりの前書きとして、東京で生まれ、満洲で育ち、原籍は、しかし北海道であるといふ事実を冒頭に挙げて、今度は積極的に「定着を価値づける、あらゆるものが、ぼくを傷つける。」と書いて、時系列の「外部の経歴」を記述してゐること。
（３）２の年譜の「作品年譜」には『無名詩集』の名前が文字として欠落してゐること。
（４）３の年譜の「作品年譜」には『無名詩集』の名前が文字として欠落してゐること。
（５）４の年譜になつて初めて、安部公房は『無名詩集』の名前を文字として表に出してゐること。

既に『安部公房文学の毒～安部公房の読者のための解毒剤～』（もぐら通信第５５号）で詳述しましたやうに、安部公房は、自分と宇宙の生命に関わる大切なものは、消しゴムで書いて、余白に隠して置きます。これは意図的といふよりも、安部公房の論理による必然であり、この論理は同時に此の形式に則つて、安部公房の感情も生き生きと生きてゐるのです。」

この四つの自筆年譜に西暦で時間を入れて見ると次のやうな順序になります：

１。１９６０年１２月１５日：「年譜　『新鋭文学叢書』に寄せて』」（全集第１２巻、４６４ページ）
２。１９６４年２月２７日：「〈年譜〉『新日本文学全集』に寄せて』」（全集第１８巻、２４４ページ）
３。１９６５年２月１日：「〈安部公房年譜〉芥川賞作家シリーズ『おまえにも罪がある』に寄せて」（全集第１９巻、１２８ページ）
４。１９６６年２月２５日：「略年譜『われらの文学』に寄せて』」（全集第２０巻、９２ページ）

この最後の「略年譜『われらの文学』に寄せて』」で初めて『無名詩集』の名前を文字として表に出した後、１９６８年３月１日三田文学誌上での秋山駿によるインタヴューで次の小説たる『箱男』への言及として次の発言をします。

「安部　失踪に対して、すぐに回復ということを持ち出すことに、非常に疑念があるのです。一応三部作という形で、失踪前駆症状にある現代を書いてみましたが、この次は、すでに失踪してしまった状況で、失踪の向うにある世界を書いてみたい。乞食とチェ・ゲバラの話です。僕はふり向くことがいやなんだ。」
（全集第２２巻、４５ページ上段）

このやうに観て参りますと、１９６６年２月２５日の自筆年譜での『無名詩集』名前の初出から、この間１９６７年の９月３０日刊行の『燃えつきた地図』を執筆しながら、１９６８年３月１日の三田文学誌上での対談での発言に至る間に、「この次は、すでに失踪してしまった状況で、失踪の向うにある世界を書いてみたい」といふ思ひが湧いて来て、それが「乞食とチェ・ゲバラの話」である『箱男』といふ、読者の意識の深層に（安部公房の発見者埴谷雄高の用語を使へば）「存在の革命」を起こすための小説の構想に至つたといふことになります。その上で、理解を深めるために、冒頭の事実を再掲して眺めれば、

１。１９７３年1月１２日：「安部公房スタジオ」旗あげ［談話記事］（全集第２３巻、４０２ページ）
２。１９７３年3月３０日：『箱男』刊行（全集第２４巻、９ページ）
３。１９７３年9月１日：『無名詩集』を巡る対談『わが作品を語る―安部公房』（全集第３０巻、１７４ページ）

といふ順序になる。さて、それでは再度、

何故安部公房は１９７３年９月１日に『無名詩集』を巡る対談を自ら企画したか？

「『鏡子の家』の中のS・カルマ氏」で論じた通り、そしてそれを私は論理としてそのやうに書いたが、しかし文字で明らかに示した訳ではない私の結論を、ここで文字にすれば、

<u>三島由紀夫を殺したのは、三島由紀夫の読者自身である</u>。

といふことです。もう少し言葉を尽くせば、

三島由紀夫を殺したのは、『鏡子の家』を理解せず、作者と作品に極く冷淡な態度を当時示した文壇と三島由紀夫の読者である。

といふことです。もう少し言葉を尽くせば、

三島由紀夫をあの死に追いやつたのは、『鏡子の家』を理解する事が出来ず、作者と作品に無関心といふ冷酷な態度を当時も今も示してゐる三島由紀夫の愛読者である。

三島由紀夫の世界に行けば、読者の間（研究者を含む）では其の死の原因を巡り、議論百出で喧（かまびす）しい。しかし、これら名探偵諸君が実は真犯人自身であつたといふトリックには誰も思ひが至らない。大島渚との対談で、再度引用すれば、三島由紀夫は次のやうに率直にこのことを語つてゐるにも拘らず。

「「鏡子の家」でね、僕そんなこというと恥だけど、あれで皆に非常に解ってほし かったんですよ。それで、自分はいま川の中に赤ん坊を捨てようとしていると、 皆とめないのかというんで橋の上に立ってるんですよ。誰もとめに来てくれなか った。それで絶望して川の中に赤ん坊投げこんでそれでもうおしまいですよ、僕はもう。あれはすんだことだ。まだ、逮捕されない。だから今度は逮捕されるよ うにいろいろやってるんですよ。しかし、その時の文壇の冷たさってなかったんですよ。僕が赤ん坊捨てようとしてるのに誰もふり向きもしなかった。 」（大島渚との対談「ファシストと革命家」(『映画芸術』 １９６８年１月号)

「鍵のかかる部屋」と「鏡子の家」の間に、三十歳前後の三島由紀夫は、『太陽と鉄』に正直に書いてゐるやうに、言葉によつて侵蝕される肉体から言葉を排除して純粋な肉体、即ち存在を創造するために肉体の鍛錬に精励し始めたといふのに、この時期、しかし、当時の三島由紀夫の読者は、三島由紀夫の此の精神と肉体の総力を挙げた試みを理解しなかつた［註１］。『裸体と衣装』といふ日記をまで残して作者の努力を読者に伝へやうとしたにも拘らず、読者は三島由紀夫を理解しなかつた。三島由紀夫の読者は、この『裸体と衣装』といふ『鏡子の家』執筆・生活記録日記が、何故『鏡子の家』に対して「裸体と衣装」といふ題名であるのかを理解しなかつた。

［註１］
「『鏡子の家』の中のS・カルマ氏」（もぐら通信第９６号）をお読みください。詳述しました。

この、「自分はいま川の中に赤ん坊を捨てようとしていると、 皆とめないのかというんで橋の上に立ってる」男の名前は三島由紀夫といひ、そして三島由紀夫が川に投げ捨てようとして、三島由紀夫に両足首を掴まれて泣き叫んでゐる逆さに吊された赤ん坊の、「誰もとめに来てくれなか った。それで絶望して川の中に赤ん坊投げこんでそれでもうおしまい」になつた当の赤ん坊の名前は平岡公威（きみたけ）といふのです。

『裸体と衣装』といふ執筆日記の別名は、『平岡公威と三島由紀夫』といふ題名だつたのです。さうして、肉体といふ裸体を鍛える作家を中心に考へれば、この日記の別名は『三島由紀夫と平岡公威』といふ題名でもある。これは『裸体と衣装』といふ一枚の同じ看板の裏表です。そして、この名も無い無名の看板の板そのものが三島由紀夫の肉体、即ち肉体から言葉を排除した純粋な肉体、即ち（三島由紀夫の言ふ）存在である。

安部公房は、三島由紀夫の、生きた人間たちを、たとへ文壇といふ文学の専門家たちの集団と其の場所があつたとは云へ、信じたがために至つた此の絶望と、現実を信じ、現実に期待したがために起きた自分の文学的人生の致命的な失敗を、聞いてゐたに違ひない。さうして深く理解し、その理解を自分の経験とともに三島由紀夫に語り、慰めたに違ひない。その経験とは、１９５０年代の初めに日本共産党員にまでなつてまで言語によつて「存在の革命」を起こさうとして、共産党といふ政治的組織と党員といふ人間からなる現実を、自分の命を喪ひ

かけたほどに信用し過ぎたために経験した深い、幻滅と絶望の経験のことである。後年、ドナルド・キーンとの対談『反劇的人間』の中で、このことを反省して、「人間を信じるのは、疑うのと同じくらいいけないことだと、つくづく思いました」と述べてゐる（全集第２４巻、３２７ページ上段）。

この発言は此の対談の最後の章の最後の発言として出てくるもので、その最後の章は「アドルフ・ヒットラー」といふのです。これに対して、「ぼくは、不思議にヒットラーが出てくる映画が好きです。あれを見ていると、やっぱり悲しくなる。」「ぼくはドイツ側が撮ったナチスの、とくに軍隊のフィルムを見るのが好きです。」といふ発言が此の章の冒頭にあつて、これは勿論、人間と言葉による演説とヒットラーの演技とヒットラーユーゲントの若者たちの姿を陰画で見て「あれは人間のいちばん絶望的なものだと思」ふ其の姿に絶望するために、安部公房はナチスの映画を観てゐるのです（全集第４巻、３２４ページ下段から３２５ページ上段）。かうして、この論題の文脈でキーンさんとの対談の日付を見ると、１９７３年5月２５日であることは誠に興味深く、以上のやうに時系列で考察をして来ると誠に意義深いものがあることに気づきます。さうであれば、再度この年の関係する出来事をまとめると、次のやうになります。

１。１９７３年1月１２日：「安部公房スタジオ」旗あげ［談話記事］（全集第２３巻、４０２ページ）
２。１９７３年3月３０日：『箱男』刊行（全集第２４巻、９ページ）
３。１９７３年5月２５日：ドナルド・キーンとの対談『反劇的人間』
３。１９７３年9月1日：『無名詩集』を巡る対談『わが作品を語る―安部公房』（全集第３０巻、１７４ページ）

さて、安部公房は三島由紀夫の此の話を聞いてゐたに違ひない。この話が二人の間でいつなされたか。１９７３年である訳はない。三島由紀夫の死は１９７０年１１月２５日です。とあれば、『鏡子の家』刊行の１９５９年9月２０日以降、理屈を立てれば１９７０年１１月１５日の三島由紀夫が安部公房に掛けた最後のお別れの電話［註２］までの間のいつかといふことになります。

［註２］
これについては「『方舟さくら丸』の中の三島由紀夫」（もぐら通信第５３号）の結末の一行をお読み下さい。これは『方舟さくら丸』の１９８４年の発行日が三島由紀夫の祥月命日の１０日前の１１月１５日であり、且つ死の１週間前に横尾忠則に最後のお別れの電話を三島由紀夫がしたことから察した私の推理です。このやうな間柄であつた以上、そのやうなことがあつても不思議ではないといふことです。

１９６６年2月1日の二人の対談『二十世紀の文学』に此の話をした後だといふ趣きは、ない。この『鏡子の家』事件（と仮に此処でさう名付けることにするが、この事件）は此の対談の後である可能性が高いと私は思ふ。それは、やはり此の対談で交はされる作者ー読者論がそれを示してゐて、同時に此の論を二人でなす直ぐ前のところで、次の三島由紀夫の発言があるからです。

「三島　僕、読者について今度、森鴎外集の解説で書いたが、森鴎外を支持している読者は山の手インテリで、ドイツ的教養主義で、それで、そういうようなドイツ的教養主義を、非常に自分

の人生の至上のあれにしていた山の手インテリという、読者層がズーッとあってね、それが森鴎外を支持してきたので、たいへんな尊敬だったよね。それが全部崩壊したら、どうなるかということを書いたのだ。そういう点から、読者層の研究は進んでないよ。」（全集第２０巻、８０ページ上段）（傍線引用者）

「三島　きみは、それは集合的無意識ということを言うの？
　安部　むずかしいことを言うなよ。そういう学術的用語を抜きにしてだな。（笑）
　三島　僕は混沌がとてもいやなんだ。つまり、読者とかね。
　安部　読者は自己の主体で、作者は客体化された自己なんだよ。
　三島　とっても混沌というのは気味が悪いよ。
　安部　気味は悪いさ。」（全集第２０巻、８２ページ上段）（傍線引用者）

この作者ー読者と其の意識ー無意識論は、このやり取りの直後に中途半端な形で対談そのものと一緒に終はつてゐるので、この後更に二人で、当日であるか、日を置いてであるか、三島由紀夫が具体的な例として『鏡子の家』事件について安部公房に話した可能性を考へることができる。このやうに考へて来ると、三島由紀夫が『鏡子の家』事件を打ち明けたのは、１９６６年2月1日といふ日付は文藝誌『文藝』に発表された月ですから、その前月１９９６年1月から死の１０日前といふことになります。しかし、更に安部公房全集の側で、二人が頻繁にあつてゐた時期は三島由紀夫が楯の会を結成する前までで、それ以降は１年に1回位であつたことが次の安部公房の発言で判ります。

「安部　それはね、三島君という人は、珍しく対話のできる男でね。やはりかけがえのない存在だったと思います。（略）一年にいっぺんぐらいしか会わなかったけど。ぼくは彼が自衛隊に行くなんてまったくこっけいだった。ぼくがこっけいだと思っているということを、彼もちゃんと知っていてね。」
（古林尚によるインタヴュー『共同体幻想を否定する文学』全集第２３巻、３０１ページ下段）

おそらくは、とすれば、『鏡子の家』事件を打ち明けた時期は、１９９６年1月末日から楯の会の結成日１９６８年１０月５日までの３年の間といふことになります。あるいは、楯の会が結成された後で、１年に1回位しか会はなかつた時期に、何故楯の会を結成したのかといふ三島由紀夫の説明の中で『鏡子の家』事件を話したといふ可能性もあります。といふのは、楯の会の行く末は、私兵の決起といふことであれば、「まだ、逮捕されない。だから今度は逮捕されるよ うにいろいろやってるんですよ」といふ『映画芸術』 １９６８年1月号誌上で大島渚に語つてゐる通りだからです。この発言は１９６８年1月号誌上（といふことは前月の対談）、楯の会の結成は同年１０月５日。「だから今度は逮捕されるよ うにいろいろやってるんですよ」といふ言葉が楯の会の結成であることは時系列で事実を見れば、明らかです。これ以上の詮索は、ここまでとしませう。そして掲題の問ひに答へませう。

何故安部公房は１９７３年に『無名詩集』を巡る対談を自ら企画したか？

安部公房は、後期２０年を三島由紀夫の死後開始するに当たり、この最も互ひを理解し合つた親しき友が『鏡子の家』事件について語つた絶望を思ひ出して、同じ轍を踏んではならないと思つた。何故なら、後期２０年の小説も、安部公房スタジオの詩的総合藝術としての舞台活動も、十代の自分の文学の基礎である安部公房とリルケの詩の世界に回帰する活動であつたからです［註３］。安部公房はかう内心独語したに違ひない。

［註３］
安部公房の、前期２０年後期２０年といふ此の自己回帰の人生については「安部公房の人生表」をご覧ください。ダウンロードは：https://www.scribd.com/document/390472019/安部公房の人生表-v4-掲載版scribd

”三島君の十代の詩の魂を自分で橋の上から川に投げて殺してまで、時代といふ世の中に合わせて小説といふ散文形式を書いて小説家に徹して生きようとした三島君が、時代の読者から見捨てられた、誰も三島君の赤ん坊殺しを止めなかつたといふことから言つても、今度俺の魂であり赤ん坊であるリルケと自分の詩の世界を世に問ふに当たり、果たして俺の十代の詩の世界が時代の読者に理解されるものであらうか？三島君の二の舞になるわけには行かない。とすれば、よし、こちらから打つて出て、『無名詩集』が如何に俺の読者に理解されないかを確認しよう。”

安部公房の胸中は大体このやうなことではなかつたかと私は推察する。さうでなければ、あれほど大切にして筐底に秘して表に出さず、１９７２年9月２０日から１９７３年7月２０日にかけて刊行された『安部公房全作品』全１５巻にも『無名詩集』の所収を断つた安部公房であつてみれば［註４］、同年９月の『無名詩集』を巡る対談には、この方面から推理しても、期するものがあつた筈である。従ひ、これら既述のことに安部公房スタジオのことを入れると、次の年譜を得る。

［註４］
古林尚によるインタヴュー『共同体幻想を否定する文学』（１９７２年1月６日）に次のやりとりがある（全集第２３巻、２９５ページ上段）：

「古林　話があちこちに飛んで申訳けありませんが、安部さんの『無名詩集』。ガリ版刷りで六十ページぐらいのパンフレットだったけど、あれを七年ほど前に鶯谷の古本屋で見つけて、あのころ二千円くらいだったですか、ちょうど持ち合わせがなかったので、店員と買う約束だけして帰宅したんです。そしたら、事情を知らぬ本屋の主人があとで別の人に売ってしまって、とうとう入手しそびれたんです。
　安部　そのほうがよかった（笑）。
　古林　こんど全集が出るでしょう。
　安部　入れませんよ。
　古林　入れませんか。あのパンフ、いまは二十万円だか三十万円だかのべらぼうな値段になっているんでね。
　安部　ほんとうにばかばかしいね。このごろの古本値段。あれはね、ものすごく子供のときに書いたものがはいっているんだからね、みっともなくて入れられないよ。」

１。１９７２年9月２０日：『安部公房全作品』第１巻刊行
２。１９７３年1月１２日：「安部公房スタジオ」旗あげ［談話記事］（全集第２３巻、４０２ページ）
３。１９７３年3月３０日：『箱男』刊行（全集第２４巻、９ページ）

４。１９７３年５月１５日：戯曲『愛の眼鏡は色ガラス』刊行
５。１９７３年５月２５日：ドナルド・キーンとの対談『反劇的人間』
６。１９７３年６月４日：『愛の眼鏡は色ガラス』初演
７。１９７３年７月２０日：『安部公房全作品』第１５巻（最終巻）刊行
８。１９７３年９月１日：『無名詩集』を巡る対談『わが作品を語る―安部公房』（全集第３０巻、１７４ページ）

この年譜を眺めて判る事は、小説『箱男』はベストセラーになつて成功を収めた（小松左京との対談『日本の理想国家はカナダだ』の冒頭の二人のやりとりをみよ。全集第２４巻、３８７ページ）といふことであり、安部公房スタジオの初演『愛の眼鏡は色ガラス』も成功を収めたといふことである。それでは次に、この二つの藝術範疇の根底に秘めてゐた『無名詩集』の時代的評価は如何ならむ、といふことであつたらうといふことになります。

そして、対談の相手として安部公房の指名したのが、安部公房の生活の公私をともによく知る堤清二（詩人としての名前は辻井喬）ではなく、『無名詩集』を唯一正面から取り上げて批評した文藝評論家磯田光一でもなく［註５］、１９６８年３月１日三田文学でインタヴューをして『燃えつきた地図』を詳細に読み込んで安部公房に作品の冒頭と結末の坂の傾斜角度が異なることを指摘して安部公房から奉天では「窓が、非常に強い意味を持っているのですね。」、窓といふのは「非常に重要なんですよ。」といふ二度の発言を引き出した此のことだけでも安部公房文学史上に名を残すといつても良い文藝評論家秋山駿［註６］といふ、これら３名の鋭角的な詩人や評論家を避けて、敢へて、英文学者でジャーナリスティックな方面の著作もある此の文芸評論家でもある人物を選んだといふ所に、安部公房の対談相手の選択の微妙・絶妙なる匙加減を私は感ずる。

［註５］
『詩人としての安部公房』（『詩人たちの論じた安部公房論（連載第４回）』もぐら通信第３１号）で磯田光一の『無名詩集』論を論じましたので、お読みください。

［註６］
『奉天の窓の暗号を解読する～安部公房の数学的能力について～』（もぐら通信第３２号および第３３号）をお読み下さい。「奉天の窓」の意味を読み解きました。

そして、安部公房の企（たくら）みは当たつた。この評論家が最初に「バロックについて」と題されてゐる出だしのやりとりで『無名詩集』中言及するのは「孤独より」といふ詩の「其の四」といふ連と「祈り」といふ詩の二つであり、共に一見叙情性を備へた詩であるからです（全集第３０巻、１７４～１７６ページ）。

安部公房を語るのに「最近の文化現象はバロック的な傾向があるといわれていますけれども、”ゆがんだ真珠”という考え方ですね。その”ゆがみ”といふものをぼくは安部さんの作品からいつ

も感じるんですけれども、バロック文化というものについてどういうようなお考えかを最初にお聞きしておきたいんですが。」といふこの人の入り方は正しい。何故なら安部公房の世界認識は「世界は差異である。」といふ超越論ですから、差異とは連続量として見れば歪みであり（”歪んだ真珠”）、非連続量として見れば、それは隙間である。といふことから云つても、諸処既述の通り、この世界認識を下敷きに生まれる安部公房の文学は、世界文学の階層では、１７世紀のバロック小説、スペインの『ドン・キホーテ』やドイツの『阿呆物語』と同様/以来現代文学に至る、明らかにバロック文学であるからです。

さて、かうして、バロック文学としての安部公房文学といふ文脈の中で『無名詩集』を論ずるといふことになるのです。これは、安部公房文学に関する優れた着眼であり、対談への入り方です。あるいは、ここまでさうであれば、事前に出版社の編集部を介して二人の間で話の内容についてある程度のやりとりがあつたのかも知れないと思ふほどに、さうです。

この評論家がこれらの詩を語る語り方で、『無名詩集』が叙情的に読まれてゐることに、即ち、これが超越論の詩であり、リルケばりの汎神論的存在論の詩であつて、非常に精緻精密に数学的に（topologyー位相幾何学ーによつて）練られた詩篇であることが全く理解されず、別にtopologyが理解されなくとも構はないが、しかし、詩の持つ論理性、即ち汎神論的存在といふ生命の、永遠の循環性その他の形象（イメージ）に論理的・散文的に触れられることすらなかつたことに［註７］、安部公房は逆に安堵もし、これからやつて来るかも知れぬ絶望に備へる覚悟をしたのではないかと思はれる。何故なら、同じ９月１日に発表された『周辺飛行２３』は「シャボン玉の皮」と題されたエッセイであつて（全集２４巻、４１６ページ）、再度何故なら「これが、安部公房が何故塵芥(ゴミ)を愛するか、ビルの隙間に落ちてゐるひしやげたダンボール箱をニューヨークに行つてまでカメラに収めるのか、自動車の廃墟処 理場の写真を入れて其処に詩が付けられるのかといふ理由なのです。（略）これはこのまま安部公房の自伝といつて良いもの」だからです （『周辺飛行』論 （９）： ３。『周辺飛行』について(（４）：「たとえば、タブの研究周辺飛行６」（もぐら通信第９６号））。この自伝の世界が『無名詩集』の世界を最もよく後年の安部公房の言葉で『無名詩集』の精神と魂のあり方を散文的に表してゐます。もつとも、散文的とはいふものの、安部公房らしく、やはりどうしても詩的である事は免れない散文なのですが。安部公房を知るために、ご一読を薦めます。この「シャボン玉の皮」を追記して更に年譜をまとめると次のやうになります。『無名詩集』を巡る対談『わが作品を語る―安部公房』とエッセイ『シャボン玉の皮』の発表が同一の日であるといふ事が、これも偶然の一致とは思はれない。明らかに安部公房の意志が働いてゐる/ゐないわけがない。

［註７］
この「祈り」といふ詩をtopologyとリルケの存在論の視点から論ずると如何なるかの例を以下に「リルケの『オルフェウスへのソネット』を読む（４０）第２部 XV～安部公房をより深く理解するために～」（もぐら通信第９７号）の【安部公房の読者のためのコメント】より引用してお伝へします：

「【安部公房の読者のためのコメント】

水といふ存在の形象の永遠の尽きることのない天地の間の循環は、リルケの詩想の一つです。

安部公房ならば、これをtopologyの一筆書きで理解したと言へば、読者には理解されるでせう。或いはまた、この

詩は、自然のこととして、自然の中のメビウスの環を歌つたと言へば、これも通じるでせう。同じ詩想を歌つた安部公房の詩が『無名詩集』にあります。それは、「祈り」といふ詩です。

祈り

神よ
せめて一本の　木の様であつて下さい
夕ともなれば
拡つて行く影と共に
宇宙の影に融けて行く
果樹園の実りの様であつて下さい
或ひは熱にうなされた額の上で
跡もなく消えて行く一ひらの
雪の様であつて下さい
僕達はあなたのまはりで
出来得れば
日々に耐え　影の動きに
移ろつて行く時の様でありませう
せめて限られた樹液の中で
音もなくいとなむ流れでありませう

しかし、この詩想は安部公房らしく、既に陰画としての循環になつてゐます。陰画のメビウスの環です。メビウスの環の接続線は「宇宙の影に融けて行く」。「或ひは（略）/跡もなく消えて行く」。このやうな接続として生きる「僕達はあなたのまはりで/（略）/日々に耐え　影の動きに/（略）/音もなくいとなむ流れであ」る。そして、このやうな祈りであれば、これは定例的に、また折節に、繰り返され、繰り返されるならば其れは呪文である。存在はどこにどのやうに招来されて出現するか。それは、

「一本の木の様」に、「果樹園の実りの様」に、「一ひらの/雪の様」に直喩（simili：シミリ）として存在は現れる。小説家に変貌した後にも依然として安部公房の愛用する譬喩（ひゆ）が直喩です［註８］。それでは現存在たる私はどこにどの様にゐるのか。私といふ祈り呪文を唱へるものは、「移ろって行く時の様」（直喩）に「せめて限られた樹液の中で/音もなくいとなむ流れ」（事実）である。」

［註８］

安部公房の多用する直喩については『安部公房文学の毒について~安部公房の読者のための解毒剤~』(もぐら通信第55号)の「1。直喩といふ毒(修辞の毒)」にて詳述しましたので、ご覧ください。

１。１９７２年９月２０日：『安部公房全作品』第１巻刊行
２。１９７３年１月１２日：「安部公房スタジオ」旗あげ［談話記事］（全集第２３巻、４０２ページ）
３。１９７３年３月３０日：『箱男』刊行（全集第２４巻、９ページ）
４。１９７３年５月１５日：戯曲『愛の眼鏡は色ガラス』刊行
５。１９７３年５月２５日：ドナルド・キーンとの対談『反劇的人間』
６。１９７３年６月４日：『愛の眼鏡は色ガラス』初演
７。１９７３年７月２０日：『安部公房全作品』第１５巻（最終巻）刊行
８。１９７３年９月１日：『無名詩集』を巡る対談『わが作品を語る―安部公房』（全集第３０巻、１７４ページ）

９。１９７３年9月1日：エッセイ『シャボン玉の皮』（全集第２４巻、４１６ページ）

さて、結局、安部公房の詩的舞台は理解されたのでせうか？

回答はYESであり、NOでした。YES、アメリカでは理解されて大成功を収めましたが、NO、日本の読者（敢へて読者といひませう）には、特に試みの究極的な到達である『仔象は死んだ（イメージの展覧会III）』は日本では理解されなかつた。

私は、日本での演劇界からの此の作品に対する反応について安部公房の書いた、安部公房にしては珍しく絶望的な気配の漂ふ短い文章の終はりを読んだ記憶があるのですが、今全集を探してもうまく見当たりませんので、次の二つの文章を引用して、これに代へて、この論考の終はりとします。一つはキーンさんによるインタヴュー『イメージの展覧会』（全集第２６巻、４０２ページ）、もう一つは『近況―また小説お預け』（全集第２６巻、４０８ページ）から。

「キーン　今回のアメリカ公演、大成功でしたね。
　安部　ありがとうございます。

（安部公房が日米の観客と演劇界による劇評のあり方の違ひにつき述べて、日本の劇評価の基準のあり方についての不満を述べた後でーキーンさんの次の引用冒頭の「絶望」といふ語彙の選択は、それまでにも何度も安部公房から此の不満の言葉を話を聞いてゐることを思はせるー、）

　キーン　でも、日本で芝居を続けるのに絶望したのではないでしょう。むしろ今回のアメリカ公演は、「安部公房スタジオ」が日本においてむしろ活動していく上で、大きな刺激になったんじゃないですか。
　安部　もちろんです。（略）」（全集第２６巻、４０４ページ下段）

「イメージの展覧会「仔象は死んだ」」のアメリカ巡業は一応の成功だったと思う。観客の反応も、新聞批評も予想をはるかに上まわってくれた。そのせいか、東京での凱旋公演も今までになく入りがよかった。」（全集第２６巻、４０８ページ上段）（傍線筆者）

最後の最後に、三島由紀夫に安部公房が、恐らくは繰り返し語つた魯迅の言葉「絶望の虚妄なるは、希望の虚妄なるにひとしい」といふ言葉を以つて、この論考を終はることにします。

「『周辺飛行』論 (7)： 3。『周辺飛行』について(4) ：『自己犠牲ー周辺飛行4』」（もぐら通信第９４号）の「6。安部公房のニュートラルと三島由紀夫のニュートラル 」より引用します。ここに書かれた三島由紀夫の１９７０年１１月２５日の檄文の中の「絶望」は、安部公房が三島由紀夫に、多分間違ひなく繰り返し語つた魯迅の絶望、希望の一形式としての絶望のことです：

「二十五年間に希望を一つ一つ失つて、もはや行き着く先が見えてしまつたやうな今日では、その幾多の希望がいかに空疎で、いかに俗悪で、しかも希望に要したエネルギーがいかに厖大(ぼうだい)であつたかに唖然とする。これだけのエネルギーを絶望に使つていたら、もう少しどうにかなっていたのではないか。」（傍線引用者）

安部公房が三島由紀夫に語つた魯迅の絶望の言葉は、三島由紀夫の人生の最後の瞬間まで、共有されて、生きてゐた。

勿論、上の引用に続く檄文中の「ニュートラル」は、安部公房が三島由紀夫と共有して、後者の死後の安部公房スタジオの活動に活かした演技論の中核概念の名前です。安部公房スタジオの活動の半面が、三島由紀夫の弔ひ合戦であることは、この「『周辺飛行』論 （７）」（もぐら通信第９４号）にて既述の通りです。

上の引用を含む章の次の章である「「7。安部公房の絶望と三島由紀夫の希望 」もお読みください。安部公房と三島由紀夫の共有した絶望と希望がよくお解りになる筈です。

以下宮西忠正著『安部公房・荒野の人』から引用して、１９７０年代のリルケと自分の詩の世界へと回帰した安部公房の試みが、如何に理解されなかつたかといふ証明をしたい。

１９７０年代の（準備期間を入れた）１０年が安部公房スタジオの活動期間です。この期間のうち後半の５年が最も安部公房らしい詩的空間の創造に成功した時期で、安部公房らしい詩的空間といふ意味は、舞台が沈黙の中に存在して、抽象度が高まり、安部公房の存在論の記号を使つて表せば、お能の舞台のやうな《存在》の舞台になつて行く。それと同時に此の時期（１９７３年の『箱男』に次ぐ）二つ目の小説『密会』を１９７７年に発表する。

１９７６年（昭和５１年）「１０月、「案内人（GUIDE BOOK II）」を西部劇場で演出、上演一九七七（昭和５２）年六月、〈音＋映像＋言葉＋肉体＝イメージの詩〉と謳った「イメージの展覧会」を池袋の西部美術館の展示フロアで演出・上演した。」（同書１７２ページ）

１９７７年１２月５日、「〈純文学書下ろし特別作品〉『密会』が新潮社から刊行された。
　だが、（略）各誌紙の書評は、プロットを紹介する態のものや、〈日本の文学界の現状のなかで示している奇異な孤立をあらためて思った。〉（中村真一郎）などと文学史的な位置づけを示すことでお茶をにごすものがほとんどだった。そのなかで若手の評論家である岡庭昇は、〈戦後文学は志の文学であったが、むろんそれだけではない。なににもまして明晰な方法意識による文学でもあった。この方法意識のひとつの極北が、アヴァンガルドにほかならない。アヴァンガルドとは、ひとくちにいえば現実をこえたところに現実を見出す方法である。しかし『密会』の「非現実」とは、たんに現実性の欠落にすぎない。〉と痛烈に断じた（「戦後文学の敗退」、《文芸展望》一九七八・春）（同書１７３ページ）

「『密会』の「非現実」」が二十一世紀の今現実になつてをり（といふことは当時も虚構の中で紛れもない現実であり、虚構の中であればこそ同時代の真実であつたといふことの証明であるが）、監視カメラでの路上などの公共空間での監視と盗聴や、ネット上の情報の窃盗やネット上での検閲などといふ共産主義的な、全体主義的な、隠れたビッグブラザーである病院副院長の馬によるファシズムの恐ろしい到来を日々経験してゐる私たちから見れば、この「若手の評論家である岡庭昇」の、若さに頼つただけの論拠のない断言が誤りであること明々白々である、よつて死んでゐるならば墓を掘り起こして引きずり出し（自分の墓を暴（あば）けといふのは安部公房が安部公房スタジオの若者たちに言つた教へである）、その死体を市中引き廻しの上、獄門申し付ける（と、ここはあなたが遠山の金さんか大岡越前守になり切つて、お白州の上に座つてゐる罪人岡庭昇に対し、裃（かみしも）をつけて、音吐朗々と声に出して読んでもらひたい）。弱者への愛には、情け容赦なく、いつも殺意がこめられてゐるのだ。

「そのころの公房の姿を、《新潮》編集長をしていた谷田昌平がつぎのように伝えている。〈書下ろしシリーズ第四作の「密会」がでたのは昭和五十二年末であるが、その翌年七月に安部さんと京王プラザホテルのメンバーズ・バーで飲んだ折、氏は珍しく元気がなく、「密会」に対する批評らしい批評がなかったことや、仕事の空しさなどを口にし、ヘミングウェイの死に触れたりした。世界的な名作「砂の女」を書いた安部さんが、前衛作家としての孤高の姿勢を貫いて長編を書き続ける苦しみを垣間見る思いがした。〉（「「砂の女」の頃」一九九三・四《新潮》」（同書１７４ページ）

かうして、昭和五十四（１９７９）年、安部公房５５歳の「六月、「仔象は死んだ（イメージの展覧会）」を再演（横浜青少年ホール、二十四日。西部劇場、二十九～七月八日）。」（安部公房スタジオ編集、創林社刊『安部公房の劇場』８２ページ）の後、安部公房は上述１９８０年１月１日からの、依然として詩人のままの写真家も兼業しながらの、箱根隠棲時代へと入る。

箱根隠棲時代の小説は二つの長編小説、１９８４年１１月１５日刊行の『方舟さくら丸』と１９９１年１月１日刊行の最後の小説『カンガルー・ノート』です。前者『方舟さくら丸』の冒頭には三島由紀夫が登場してゐることは「『方舟さくら丸』の中の三島由紀夫」（もぐら通信第５３号）にて既述の通りです。

さて、結局、後期２０年に書かれた安部公房の《存在》の小説である詩的散文小説は理解されたのでせうか？

三島由紀夫の言ひ方を借りれば、前期２０年の間に書かれた小説を一見写実主義的な小説と理解した安部公房の「読者層がズーッとあってね、それが安部公房を支持してきたので、たいへんな尊敬だったよね。それが全部崩壊したら、どうなるかということを」後期２０年の、特に１９７５年以降について私は書いたことになるのでせうか。

追記：
私は当時のマルクス主義国家ドイツ民主共和国（通称東ドイツ）の通訳稼業をしてゐた１９７０年代後半から１９８０年（帰国）までの間の時間の或る時に、帰国時に、安部公房スタジオの上演を西部劇場で観てゐます。入つて見れば客の入りは散々で、見渡せば、私の他には数人しかゐないといふやうな入りでした。私の記憶では帰国した年の１９８０年であるのですが、上演履歴を見てもこの年の上演はない。とすれば、一年に一度休暇で帰国した時に渋谷で観たのだといふことになりますが、それが１９７０年代のいづれの年であるものか。恐らくは１９７８年か７９年といふ安部公房スタジオの最後の年の辺りではなかつたか。私は客の入りが余りに少なく閑散たることに驚いたので、小説で有名な安部公房の劇がこんなに不人気なのかと思つたので、今だに印象が強く残つてゐる。

どのやうな舞台であつたかといふと、シンセサイザーの音楽が聞こえてゐて、これは間違ひなく安部公房のものでせう。舞台左手から役者が車輪のやうに自己回転しながら突然次から次へと舞台に出てきて一列に回転して舞台中央に進んでゆく。それは恰も自動車のタイヤを舞台の裾から次々と繰り出して隙間なく転がしたかの如くである。実に肉体を鍛へた役者たちだと思つて、これも驚いた記憶が残つてゐます。サーカスの曲芸のやうでした。さうして、曲芸のやうな肉体運動が終はつたあとは、実に安部公房の作品らしく、いつの間にか終はつてしまつてゐて、まだあるのだらうと席に座つて期待して待つてゐても、何事も舞台で起こらないので、所在なく席を立ち劇場の外へ出たのでした。この時の舞台の終はり方に私はキョトンとして、文字通り狐につままれたやうな思ひでした。開幕のベルは勿論鳴らなかつたし、閉幕の「終りし道の標べ」も立たなかつた。舞台そのものがメビウスの環の上位接続であつたのでせう。俳優の数は７、８人であつたと記憶する。１０人とはゐなかつた。

この小さな短い時間の昼間の舞台は、私の想起する感覚では３０分あるかなきかといふ上演であつた。この上演は、安部公房スタジオの年譜には名前がない。私は此の舞台の演題を憶えてゐないが、しかし年譜に残るやうな有名な演題ではなかつたし、公演の内容も資料に残り写真に残るつて見るものとは全く違ふものです。役者たちは全員原色の色とりどりの、頭から足先までの一枚ものの布で作つたと思しき、身にぴつたりの衣装を着てゐた。丁度或いは、安部公房スタジオとして最後に採用した新入生の舞台であつたものか。

この後１９８０年以降、安部公房は人との世俗的な交流を断つて箱根に隠棲する最晩年の１３年間を迎へます。『もぐら日記』を読み、安部ねり著『安部公房伝』を読み、山口果林著『安部公房とわたし』を読むと、［贋月報］を読んで時折山荘を訪ねる人がゐたことを知るとはいへ、しかし絶えず交流のあつた主たる人々は、ドナルド・キーン、編集者であつた新田敞、存在へのニュートラルな案内人の女性山口果林の三人です。

この箱根隠棲の１９８０年代に入ると一転、安部公房は、舞台を離れ、小説の他に、自身の詩の世界である写真に専念します。１９８０年１月１日境に、「カーブの向う」へと「転身」を図り

［註８］、『都市への回路』（フォト＆エッセイ）といふ、安部公房文学の理解に非常に重要な連載を始めてゐます。ここから安部公房の意識が完全に舞台といふ詩の世界から写真といふ詩の世界［註９］に移つたと理解することができます。

［註８］
この「転身」の愛が常に別離と一緒に一対であり、「無償の愛と永遠の別離による愛の真実性の証明をするた めの転身の愛」であることは、『安部公房の初期作品に頻出する「転身」といふ語について (3) 』（もぐら通信第５８号）の「IV 「転身」といふ語のある小説を読む」に、安部公房の存在概念との関係でも詳述しましたので、ご覧ください

［註９］
写真が如何に安部公房にとつての詩の世界であるかは『もぐら感覚５：窓』（もぐら通信第３号）、「『箱男』論～奉天の窓からの８枚の写真を読み解く』（もぐら通信第３４号）を、１９８０年以降の其の実際の活動ぶりは『テープレコーダーを持て―第1回PLAYBOYドキュメント・ファイル大賞選評：安部公房の選評と採点表』（もぐら通信第９２号）にて詳細に論じましたので、ご覧ください。それぞれの号は次のURLにてダウンロードすることができます：
１。『もぐら感覚５：窓』（もぐら通信第３号）https://docdro.id/sUswLPB
２。「『箱男』論～奉天の窓からの８枚の写真を読み解く』（もぐら通信第３４号）：https://docdro.id/o8tVuOZ
３。『テープレコーダーを持て―第1回PLAYBOYドキュメント・ファイル大賞選評：安部公房の選評と採点表』（もぐら通信第９２号）：https://docdro.id/A5IEaRM

安部公房

過去のない未来人間

昭和五十二年（１９７７年）『別冊１億人の昭和史　昭和文学作家史　二葉亭四迷から五木寛之まで　芥川賞・直木賞受賞作家全名鑑』毎日新聞社

冊一億人の昭和史

昭和文学作家史

—目次—

アルバム

葉亭四迷……近代文学の先駆者……20
口一葉……明治女の哀しみ……25
鷗外……巨大な啓蒙作家……29
目漱石……近代文学の〝古典〟……34
鏡花……妖美と幻想と……39
木田独歩……永遠の〝青春〟……44
崎藤村……懺悔と告白に生きる……48
山花袋……〝古い美学〟の破壊者……53
井荷風……江戸の残映のなかで……58
者小路実篤……「仲よきことは美しき哉」……68
賀直哉……〝小説の神様〟といわれて……73
島武郎……人生の求道者……78
崎潤一郎……豪奢な牡丹花……82
川龍之介……大正文学の鬼才……87
池寛……文壇の大御所として……96
川英治……国民文学の典型……101
佛次郎……白馬で疾駆するリベラリスト……110
戸川乱歩……極彩色の白昼夢……115
野久作……先駆的超現実者……120
野浩二……市井の隠士〝文学の鬼〟……124
端康成……美しさと哀しみと……129
光利一……〝新感覚派〟の旗手……134
辰雄……愛と死の抒情者……139
小林多喜二……悲劇の革命家……148
林芙美子……「花のいのちは短かくて」……153
火野葦平……侠骨の文学……158
太宰治……「生れて、すみません」……162
坂口安吾……「生きよ、堕ちよ…」……167
織田作之助……哀傷と孤独のソレリアン……172
檀一雄……豪放な浪漫的生涯……176
井伏鱒二……枯淡のなかの人間諷刺……181
山本周五郎……無冠の大庶民……186
石坂洋次郎……高らかな青春讃歌……190
大岡昇平……戦後文学の知的良心……211
稲垣足穂……「もてはやされれば自由を失う」……216
石川達三……〝社会派作家〟の栄光……220
田宮虎彦……強靱なストイシズム……225
井上靖……つらぬく詩情……230
松本清張……推理小説に社会正義を……235
吉行淳之介……華麗な〝性の狩人〟……239
司馬遼太郎……歴史のなかの男歌……244
深沢七郎……「生まれることは屁とおなじだ」……248
水上勉……耐えて生きた優しさ……254
三島由紀夫……憂国の美学者……259
安部公房……過去のない未来人間……264
石原慎太郎……政治と文学に賭けて……268
有吉佐和子……〝才女ぎらい〟の才女……273
大江健三郎……閉塞状況を撃つ……282
野坂昭如……黒眼鏡の焼跡・闇市派……286
五木寛之……〝デラシネ〟の旗のもとに……291

人と文学

二葉亭四迷……和田芳恵……24
樋口一葉……和田芳恵……28
森鷗外……佐古純一郎……33
夏目漱石……佐古純一郎……38
泉鏡花……村松定孝……43
国木田独歩……佐古純一郎……47
島崎藤村……佐古純一郎……52
田山花袋……佐古純一郎……57
永井荷風……森安理文……62
武者小路実篤……進藤純孝……72
志賀直哉……進藤純孝……77
有島武郎……荻久保泰幸……81
谷崎潤一郎……谷崎松子……86
芥川龍之介……荻久保泰幸……91
菊池寛……和田芳恵……100
吉川英治……武蔵野次郎……105
大佛次郎……武蔵野次郎……114
江戸川乱歩……武蔵野次郎……119
夢野久作……加藤郁乎……123
宇野浩二……近藤信行……128
川端康成……石塚友二……133
横光利一……多田裕計……138
堀辰雄……小川和佑……143
小林多喜二……秋山清……152
林芙美子……和田芳恵……157
火野葦平……和田芳恵……161
太宰治……伊馬春部……166
坂口安吾……森安理文……171
織田作之助……森安理文……175
檀一雄……伊馬春部……180
井伏鱒二……小沼丹……185
山本周五郎……武蔵野次郎……189
石坂洋次郎……山本容朗……194
大岡昇平……近藤信行……215
稲垣足穂……加藤郁乎……219
石川達三……山本容朗……224
田宮虎彦……木村得三……229
井上靖……福田宏年……234
松本清張……山本容朗……238
吉行淳之介……岡田弘……243
司馬遼太郎……尾崎秀樹……7
深沢七郎……松永伍一……
水上勉……近藤信行……
三島由紀夫……小川和佑……
安部公房……上田三四二……
石原慎太郎……山本容朗……
有吉佐和子……山本容朗……
大江健三郎……上田三四二……
野坂昭如……山本容朗……
五木寛之……松永伍一……

本誌に掲載の記事写真の無断複製・転載を禁じます

©毎日新聞社 1977

〝無頼〟と〝異端〟の作家たち……稲垣真美……64
大衆文壇の花形たち……加太こうじ……106
〝詩人・作家〟の系譜……小川和佑……144
文壇史を彩った才女たち……巌谷大四……278

カラー特集

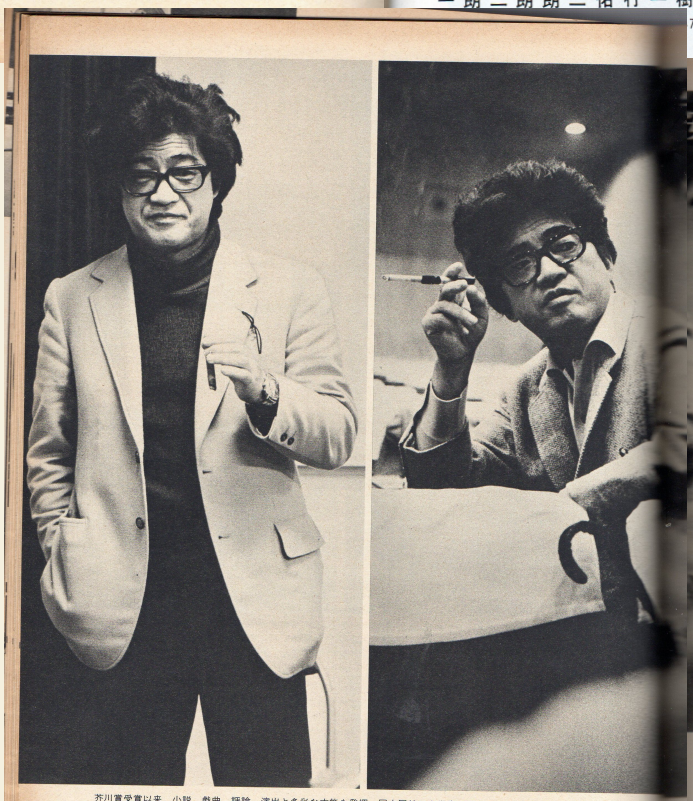
表紙にみる川端康成全著書集……3
原文つき新聞小説さしえ傑作選……10
名作に息吹く日本の抒情……195
根釧原野／標高／琵琶湖暮色／木曾妻籠碑／御坂峠／四万十川／金沢の街並／大雪大主峯／法善寺横丁／水掛不動／尾道・石段のある町／桜島

読者応募 私の出会ったこの一編

長塚節『土』……92
志賀直哉『暗夜行路』……92
林芙美子『放浪記』……296
大佛次郎『鞍馬天狗』……92
林芙美子『放浪記』……296
龍胆寺雄『放浪時代』……93
下村湖人『次郎物語』……297
中河与一『天の夕顔』……94
石川達三『蒼氓』……297
山本有三『路傍の石』……95
田宮虎彦『足摺岬』……298
松本清張『黒い福音』……299
森村桂『天国にいちばん近い島』……299
林芙美子『風琴と魚の町』……95

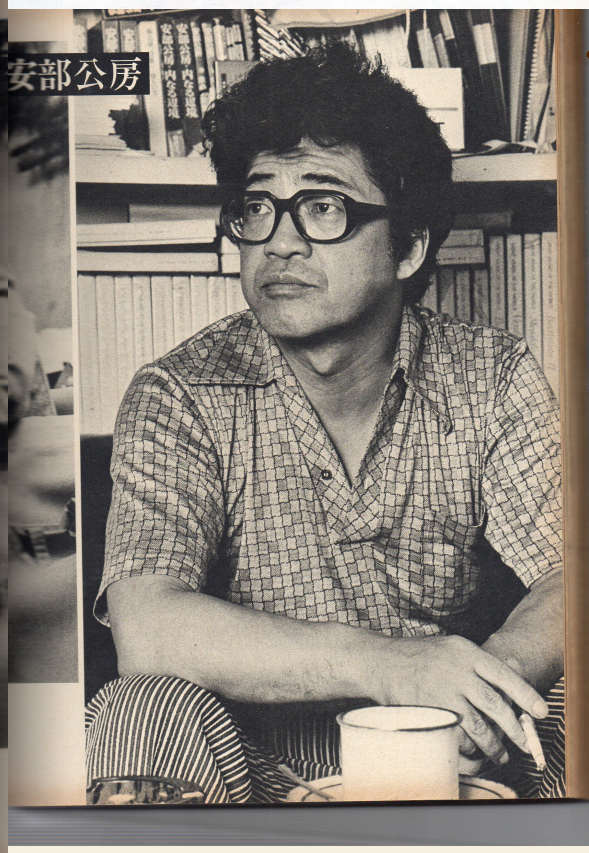
一億人の証言

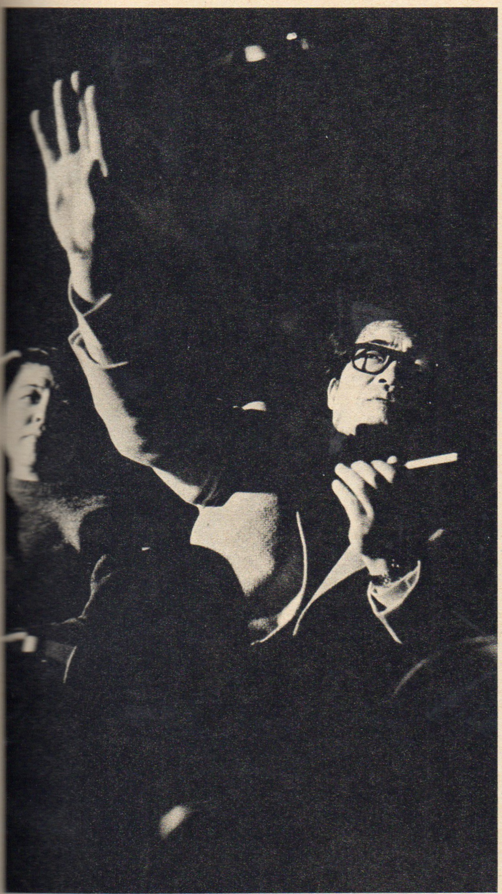
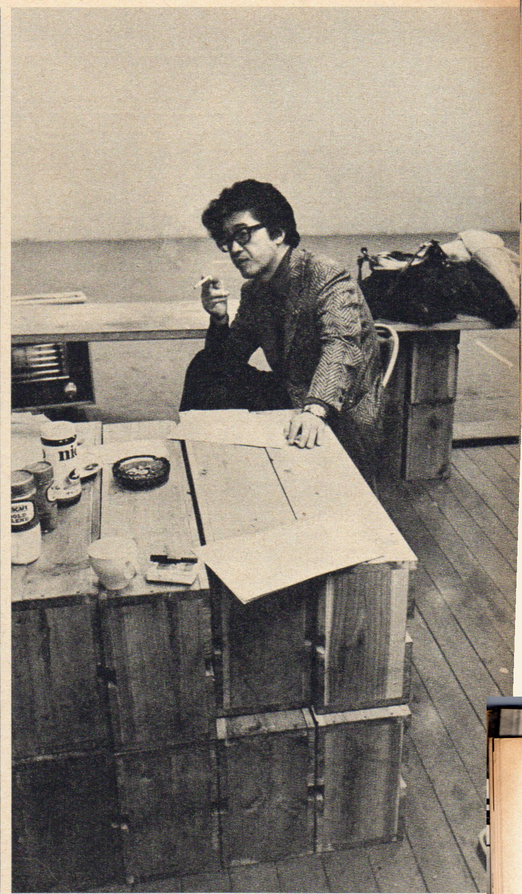
■時代と文学……小川和佑……300
■近代文壇史年表……小川和佑編……300
世界文学における日本の〝近代小説〟……307
E・G・サイデンステッカー　安西徹雄訳
芥川賞・直木賞受賞作家全名鑑……311



芥川賞受賞以来　小説　戯曲　評論　演出と多彩な才能を発揮　国内国外の文学賞を手中にした〝賞男〟は「けものたちは故郷をめざす」で船離の壁　「砂の女」の砂の壁　「他人の顔」で他人の眼の壁——と　この間断ない〝壁〟との格闘で　日常性にゆきぶりをかけ続ける　（写真左側・昭和48年2月　中央・昭和44年10月　右側・昭和49年9月）

過去のない未来人間



岸田演劇賞　シナリオ作家協会賞ほか　数多くの芸術祭賞を受賞するもあきたらず　自作の「棒になった男」を自から演出（写真左側昭和44年）〝俳優の主体性の復権〟と〝新しい演劇界のページめくり〟に意欲を燃やす　　　（右側　昭和47年　安部公房スタジオで）

演劇集団「安部公房スタジオ」旗あげ　左より仲代達矢　安部　田中邦衛　井川比佐志（昭和48年１月）

朝、目覚めて砂を掘る。日が暮れる。女を抱いて眠る。また朝が来る。砂を掘る。また日が暮れる。……『砂の女』は日常の原質や、実体が果してなんであったかを、痛烈に告白する一冊であった。

前衛作家安部公房の代表作である。

「壁――S・カルマ氏の犯罪」が芥川賞を受賞した。戦後の芥川賞作家の中で、最も異色の受賞作である。この前衛作家は日常の中に非日常を構築する。非日常から日常を透視する。

人と文学

上田三四二
（歌人・文芸評論家）

あばかれる日常性――安部公房

安部公房は国内よりも海外において著名で、その代表作『砂の女』は英、仏、独、ソ連、チェコ、デンマークなど世界各国で翻訳され、『第四間氷期』はソ連でベストセラーになっているという。

処女作『終りし道の標べに』が出たのは東大医学部を卒業した年だが、その冒頭を、彼はつぎのように書いている。

「終った所から始めた旅に、終りはない。墓の中の誕生のことを語らねばならぬ。何故に人間はかく在らねばならぬのか？……」

この言葉は安部公房の文学の本質を、いちはやく、みずから見とおしてしまったような不思議なひびきをもっている。

「何故に人間はかく在らねばならぬのか？」たしかに、そんな理由はない。こうして主人公は「かく在る」ことの拠り所たる「故郷」を捨て、故郷という存在の「根」を切断して逃亡する。そして逃亡の旅の果てに「私はあらゆる故郷、あらゆる神々の地の、対極にたどりついたのだ」と述懐するところで、物語は終っている。いや、終ったところから、新しい未来が始まらなければならないのである。

安部公房の文学において、故郷と過去は切り捨てられている。彼は「根」なんか要らない、という。故郷における過去の立証である民話や、祖国における過去の立証である神話ほど、この作家に縁どおいものはない。彼は過去への退路を断って、砂漠かまたはジャングルのような都市の中に流亡する主人公を描く。安部公房にとって、都市はその疎外の深さにおいて辺境と等価であり、それは故郷に対峙している。そして帰郷者の顔が過去に向いているように、都市の流亡者、失踪者の顔は未来に向いているだろう。『燃えつきた地図』の主人公はそうした都市の失踪者の一人であり、記憶を喪失した彼は「過去への通路を探すのはもうよそう」と考え、過去なき絶対孤立の一点としての現在から、未来に向って歩き出す。『砂の女』の主人公の失踪も、辺境即都市の観点に立てばおなじパターンを踏んでいることは明らかである。

では未来は、安部公房にどのようなものとしてあらわれているか。一般的にいえばそれは仮借なきものである。ゾッとするような異形性をもって現在をおびやかすものである。

たとえば、『盲腸』という短編では、それは来るべき世界飢餓である。『第四間氷期』では現在という一地質時代の終焉が語られ、陸地は水没する。人々は日常性に慣れてそれらを空想の出来事のように考えがちだが、かりに時間の目盛を、一年を一秒にしたコマ取り撮影のようなものとして想像してみると、日常の連続性はたちまち破れて、未来は残酷非情なおびやかしをもって現在を刺すだろう。

安部公房はそのようにして未来を先取りする。そしてそれに対する人間の備えのあり方をSF的に説く。彼に独自な奇想の生きいきと働くのはそのときだが、奇想は彼の一種の科学主義に支えられて単なる空想という以上のリアリティを帯びてくる。厳密な科学かといえばそれはあくまで擬似科学的なものにはちがいないが、それでも、飢餓時代にそなえて藻を食うことができる羊の盲腸を移植するとか、水没にそなえてえら呼吸をする水中人間を人工的に造り出すとか、そういった着想の奇抜さを科学的な衣裳にくるむことによってリアリティを保証し、その先取りした未来と未来人間をもって現在の日常性にゆさぶりをかけるのである。

安部公房の文学の本質はここにある。

「子供のころ私は幾何学の証明が大好きだった。幾何の問題を解く一番の秘訣は、図型からくる固定観念のわくを破って、意外な補助線を発見することである。」

この言葉に沿っていえば、日常とは固定した図型である。そして奇想とはこの補助線である。彼の文学は、このかくれた補助線の発見によって、日常という固定観念を打破するところにある。

大正13年　3月7日　東京市滝野川に生れる　翌年一家は満州奉天市に移住
昭和18年　東京帝国大学医学部に入学　リルケの『形象詩集』を愛読する
(19歳)
23年　野間宏・花田清輝らと「夜の会」をつくり交流　東大医学部を卒業
(24歳)　『終りし道の標べに』を刊行
25年　「赤い繭」発表　戦後文学賞受賞
26年　「壁」「闖入者」を発表　「壁」によ
(27歳)　り芥川賞受賞
27年　「水中都市」を発表
28年　「R62号の発明」を発表
30年　『制服・どれい狩り・快速船』刊行
31年　チェコスロバキア作家同盟大会に
(32歳)　出席　東独・フランスを旅行
32年　「けものたちは故郷をめざす」「鉛
(33歳)　の卵」を発表
33年　「棒になった男」「幽霊はここにい
(34歳)　る」（岸田演劇賞）「第四間氷期」を発表　『裁かれる記録』を刊行
34年　テレビドラマ「日本の日蝕」によ
(35歳)　り芸術祭奨励賞を受賞
35年　『石の眼』他を刊行
37年　『砂の女』（読売文学賞）他を刊行
39年　『他人の顔』『無関係な死』『水中都
(40歳)　市』を刊行
40年　『砂漠の思想』他を刊行
41年　ソ連・ヨーロッパを旅行
42年　『燃えつきた地図』を刊行　戯曲
(43歳)　「榎本武揚」（文部大臣賞）「友達」（谷崎潤一郎賞）他を発表
46年　『未必の故意』『内なる辺境』他を刊
(47歳)　行　実験劇場「ガイドブック」（芸術選奨文部大臣賞）を演出
48年　『愛の眼鏡は色ガラス』『箱男』『反
(49歳)　劇的人間』（D・キーン共著）刊行
49年　『緑色のストッキング』、対談集『発
(50歳)　想の周辺』を刊行
50年　『ウエー』『笑う月』を刊行

あばかれる日常性

上田三四二

安部公房は国内よりも海外において著名で、その代表作『砂の女』は英、仏、独、ソ連、チェコ、デンマークなど世界各国で翻訳され『第四間氷期』はソ連でベストセラーになっているという。

処女作『終りし道の標べに』が出たのは東大医学部を卒業した年だが、その冒頭を、彼はつぎの様に書いている。

「終った所から始めた旅に、終りはない。墓の中の誕生のことを語らねばならぬ。何故に人間はかく在らねばならぬのか？……」（原文は傍線は傍点）

この言葉は安部公房の文学の本質をいちはやく、みずから見とおしてしまった様な不思議なひびきをもっている。

「何故に人間はかく在らねばならぬのか？」たしかに、そんな理由はない。こうして主人公は「かく在る」ことの拠り所たる「故郷」を捨て、故郷という存在の「根」を切断して逃亡する。そして逃亡の旅の果てに「私はあらゆる故郷、あらゆる神々の地の、対極にたどりついたのだ」と述懐する所で、物語は終っている。いや、終ったところから、新しい未来が始まらなければならないのである。

安部公房の文学において、故郷と過去は切り捨てられている。彼は「根」なんか要らない、という。故郷における過去の立証である神話ほど、この作家に縁どおいものはない。彼は過去への退路を断って、砂漠かまたはジャングルのような都市の中に流亡する主人公を描く。安部公房にとって、都市はその疎外の深さにおいて辺境と等価であり、それは故郷に対峙している。そして帰郷者の顔が過去に向いている様に、都市の流亡者、失踪者の顔は未来に向いているだろう。『燃えつきた地図』の主人公はそうした都市の失踪者の一人であり、記憶を喪失した彼は「過去への通路を探すのはもうよそう」と考え、過去なき絶対孤立の一点としての現在から、未来に向って歩き出す。「砂の女」の主人公の失踪も、辺境即都市の観点に立てばおなじパターンを踏んでいることは明らかである。

では未来は、安部公房にどの様なものとしてあらわれているか。一般的にいえばそれは仮借なきものである。ゾッとする様な異形性をもって現在をおびやかすものである。

たとえば『盲腸』という短編では、それは来るべき世界飢餓である。『第四間氷期』では現在という一地質時代の終焉が語られ、陸地は水没する。人々は日常性に慣れてそれらを空想の出来事のように考えがちだが、かりに時間の目安を、一年を一秒にしたコマ取り撮影のようなものとして想像してみると、日常の連続性はたちまち破れて、未来は残酷非情なおびやかしをもって現在を刺すだろう。

安部公房はその様にして未来を先取りする。そしてそれに対する人間の備えのあり方をSF的に説く。彼に独自な奇想の生きいきと働くのはそのときだが、奇想は彼の一種の科学主義に支えられて単なる空想という以上のリアリティを帯びてくる。厳密な科学からいえばそれはあくまで疑

似科学的なものにはちがいないが、それでも、飢餓時代にそなえて藁を食う事ができる羊の盲腸を移植するとか、水没にそなえてえら呼吸する水中人間を人工的に造り出すとか、そういった着想の奇抜さを科学的に衣装にくるむことによってリアリティを保証し、その先取りした未来と未来人間をもって現在の日常性にゆさぶりをかけるのである。安部公房の文学の本質はここにある。

「子供の頃私は幾何学の証明が大好きだった。幾何の問題を解く一番の秘訣は、図型からくる固定観念のわくを破って、意外な補助線を発見することである。」
　この言葉に沿っていえば、日常とは限定した図型である。そして奇想とはこの補助線である。彼の文学は、このかくれた補助線の発見によって、日常という固定観念を打破するところにある。

［編集子独言］
安部公房論は、上田三四二さんといふ方が書いてゐますが、この方は和歌を詠む専門の方で、本来古典の世界の人士と記憶してゐますが、その基礎の上に立つて、短いながらも、否、短いが故に、この伝統的な教養の上に書かれた安部公房前衛論は実に正確で、安部公房文学の本質を書いてゐる。

安部公房前衛論もこれくらい書いてくれると、価値があります。要は論の長短ではないといふ良い例であつて、安部公房の読者としては、読んで誠に嬉しい。

『匿名の神話ー安部公房試論ー』（もぐら通信第３１号）で田中美代子さんの安部公房論を掲載致しましたが、フランス文学の専攻者としてここで明確に指摘してゐた日本人の日本語で書く安部公房前衛論の欠陥は、フランスではアヴァンギャルド（前衛）といふ概念は明確に伝統といふ概念を前提にして成り立つものを、日本にフランス語に相当するフランスの伝統があるのか？無いではないか、それで如何に前衛をアヴァンギャルドといつて論ずることができるか、できないであらう。もしできるとすれば、日本語と日本の伝統の上に論ぜらるべき安部公房前衛論であるぞ、といふ主張に打ち勝つ安部公房前衛論はないと、この時私は思ひましたが、しかし、日本語の伝統的な教養の上に書かれた此の上田三四二さんの前衛論が其れで、これならば舌鋒鋭い田中美代子さんも文句はなからうと思ふのです。

上田さんは哲学用語を使つて書いてゐる訳では毛頭ありませんが、しかしその論理的な骨格はきちんと掴んでゐて、次のやうな作品上の事実を指摘してゐますので、吟味なさつて下さい。

１。topology（位相幾何学）：
（１）辺境を一筆書きで謎（なぞ）ること：「「砂の女」の主人公の失踪も、辺境即都市の観点に立てばおなじパターンを踏んでいることは明らかである。」
同じことを１８歳の安部公房は『問題下降に依る肯定の批判』の中で次のやうにあるべき都市と接続線であるtopological（位相幾何学の）道の姿として述べてゐる：

「安部公房の道は、既に１８歳の時に書いた『問題下降に拠る肯定の批判』に、遊歩場と呼ばれる道として出て参ります（全集第１巻、１２ページ下段から１３ページ上段）。

この安部公房の道は、「二次的に結果として生じたもの」であり（晩年のクレオール論を読んでいるような気持ちがします）、「第一に此の遊歩場はその沿傍に総ての建物を持っていなければならぬ。つまり一定の巾とか、長さ等があってはいけないのだ。それは一つの具体的な形を持つと同時に或る混沌たる抽象概念でなければならぬ。第二に、郊外地区を通らずに直接市外の森や湖に出る事が出来る事が必要だ。或る場合には、森や湖の畔に住まう人々が、遊歩場を訪れる事があるからだ。遊歩場は、都会に住む人々の休息所となると同時に、或種の交易場ともなるのだ。」という道なのですが、この文章を読むと、多分このとき既に、安部公房はtopology（位相幾何学）という数学を知っていたのだと思われます。

この道は、幾何学的な道であって、そこには時間がありません。時間軸で人生の道と思って引くような線は、安部公房の道ではないのです。そのように考えなければ、多くのひとがきっとここで、安部公房の言う道を誤解することになるでしょう。」
（『株の道と安部公房の道』（もぐら通信第２４号））

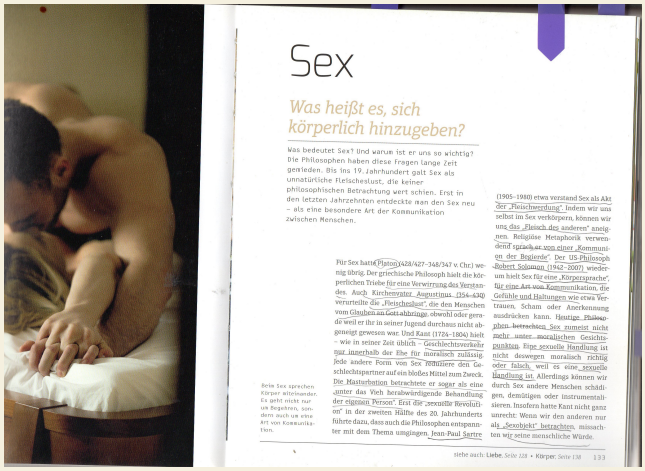
（２）故郷といふ中心と疎外された場所である辺境の等価交換：「安部公房にとって、都市はその疎外の深さにおいて辺境と等価であり、それは故郷に対峙している。疎外の深さにおいて辺境と等価であり、それは故郷に対峙している。」
これも上記（１）に引用した遊歩場の道のことをいつてゐる。このtopologyの道といふ上位接続線（積算値）がユークリッド幾何学では補助線と呼ばれてゐて、この補助線を上田さんといふ方は奇想と呼んでゐて、疑似科学と結びつけて論じてゐるわけです。

（３）二次的な存在である補助線の発見とはtopologyである：「「子供の頃私は幾何学の証明が大好きだった。幾何の問題を解く一番の秘訣は、図型からくる固定観念のわくを破って、意外な補助線を発見することである。」「この言葉に沿っていえば、日常とは限定した図型である。そして奇想とはこの補助線である。彼の文学は、このかくれた補助線の発見によって、日常という固定観念を打破するところにある。」

２。超越論による仮説設定の文学（安部公房文学の本質）：
（１）仮説設定による現在の異化：「では未来は、安部公房にどの様なものとしてあらわれているか。一般的にいえばそれは仮借なきものである。ゾッとする様な異形性をもって現在をおびやかすものである。」
（２）時間の単位化と其の等価交換：「かりに時間の目安を、一年を一秒にしたコマ取り撮影のようなものとして想像してみると、日常の連続性はたちまち破れて、未来は残酷非情なおびやかしをもって現在を刺すだろう。」
（３）疑似科学といふ仮説によるリアリティの創造：「厳密な科学からいえばそれはあくまで疑似科学的なものにはちがいないが、それでも、（略）着想の奇抜さを科学的に衣装にくるむことによってリアリティを保証し、その先取りした未来と未来人間をもって現在の日常性にゆさぶりをかけるのである。安部公房の文学の本質はここにある。」

哲学の問題１０１
（９）
性交（sex：セックス）

岩田英哉



Sex

Was heißt es, sich körperlich hinzugeben?

Was bedeutet Sex? Und warum ist er uns so wichtig? Die Philosophen haben diese Fragen lange Zeit gemieden. Bis ins 19. Jahrhundert galt Sex als unnatürliche Fleischeslust, die keiner philosophischen Betrachtung wert schien. Erst in den letzten Jahrzehnten entdeckte man den Sex neu – als eine besondere Art der Kommunikation zwischen Menschen.

Beim Sex sprechen Körper aktiv miteinander. Es geht nicht nur um Begehren, sondern auch um eine Art von Kommunikation.

Für Sex hatte Platon (428/427–348/347 v. Chr.) wenig übrig. Der griechische Philosoph hielt die körperlichen Triebe für eine Verwirrung des Verstandes. Auch Kirchenvater Augustinus (354–430) verurteilte die „Fleischeslust", die den Menschen vom Glauben an Gott abbringe, obwohl oder gerade weil er ihr in seiner Jugend durchaus nicht abgeneigt gewesen war. Und Kant (1724–1804) hielt – wie in seiner Zeit üblich – Geschlechtsverkehr nur innerhalb der Ehe für moralisch zulässig. Jede andere Form von Sex reduziere den Geschlechtspartner auf ein bloßes Mittel zum Zweck. Die Masturbation betrachtete er sogar als eine „unter das Vieh herabwürdigende Behandlung der eigenen Person". Erst die „sexuelle Revolution" in der zweiten Hälfte des 20. Jahrhunderts führte dazu, dass auch die Philosophen entspannter mit dem Thema umgingen. Jean-Paul Sartre (1905–1980) etwa verstand Sex als Akt der „Fleischwerdung". Indem wir uns selbst im Sex verkörpern, können wir uns das „Fleisch des anderen" aneignen. Religiöse Metaphorik verwendend sprach er von einer „Kommunion der Begierde". Der US-Philosoph Robert Solomon (1942–2007) wiederum hielt Sex für eine „Körpersprache", für eine Art von Kommunikation, die Gefühle und Haltungen wie etwa Vertrauen, Scham oder Anerkennung ausdrücken kann. Heutige Philosophen betrachten Sex zumeist nicht mehr unter moralischen Gesichtspunkten. Eine sexuelle Handlung ist nicht deswegen moralisch richtig oder falsch, weil es eine sexuelle Handlung ist. Allerdings können wir durch Sex andere Menschen schädigen, demütigen oder instrumentalisieren. Insofern hatte Kant nicht ganz unrecht: Wenn wir den anderen nur als „Sexobjekt" betrachten, missachten wir seine menschliche Würde.

siehe auch: Liebe, *Seite 128* • Körper: *Seite 138* 133

この主題の下でのマルクス主義者たる著者の解説と論評は質量ともに誠に貧しい。上の写真の右のページが記述のすべてです。

マルクス主義者は唯物論者であるので、人間を物質だといふ考へから云へば、確かに無機物に感覚はなく、人間の生命の本源たる性（sex：セックス）に関わる記述が少ないのは、かう考へると納得が行きさうに思ふが、しかし、人間は有機物であるので、やはり著者の言葉に、記述の質量の貧しさにあるのと同じ理由によつて、自己に対する嘘、即ち偽善の混じることは避けられないであらう。

と、さう思つて読み進めると、性の交はりに関するところでも、範疇の混同をして物事を曖昧にしてゐるやうに著者は見受けられるのは、マルクス主義者らしい。それは何と何の混同による曖昧化、即ち問題解決策の非提示と解決のない延期を図つてゐるかといへば、標題の下にある要約の言葉にある人間の性行為に関する率直な自分自身による感想”なぜ性行為は私たちにとつてかくも重要なのであらうか？”といふ本音と、本文最後にある”Sexobjekt”（性行為の対象）といふ建前との間を繋ぐ説明の放棄です。この二つの間にいつもの通り、キリスト教の性行為に関する教義（ドグマ）の歴史から始まつて哲学者の名前と言説が羅列されてゐる。知識はあるが、しかし、自分の意見はないのです。私の意見は最後尾に後述します。

”Sexobjekt”（英語ならばsex object）ととは、日本語に訳せば、性交の対象といふ意味であり、或いは性交物体といふ訳も、馴染みはないが、訳さうと思へば、さう訳することができる。或いは、性行為客観と訳せば、これに対してこれまた性行為主観があり、性交客体と訳せば、性交主体があるといふことになつて、これは形而上学での精神の世界での主体・客体論が、そのまま肉体の世界での主体・客体論になつてしまつてどうしようもないのは、ドイ

ツ語といふ言語の限界といふよりも、この筆者の言葉の使ひ方の、といふことは思考の限界だといふ事になります。相変はらずの二項対立であり、二項分裂である。主観・客観といふ二項対立は彼らの歴史では中世スコラ哲学以来のものですから、これら対立二項を否定して第三の解決策を講じるのが、筆者の役目であらうと思ふのに。

本文は、キリスト教による異性愛の禁圧から始まり、異性愛の交換は婚姻によるもの以外は悪であるといふキリスト教の歴史を述べるところかた始まる。しかしこの悪も、ローマ法王庁が認めた基準に反する場合には悪だといふことですから、さうすると、ヨーロッパ白人種キリスト教徒の住むあのユーラシア大陸の極西の大きな半島地域では、ここのところの記述によれば、

１。異性愛のみ性行為は許される。
２。異性愛は婚姻によつてのみ許される。
３。肉の喜びは唯一絶対神への信仰を妨げる。

といふことが本文に書かれてゐるところを見ると、これは人間の生命の　日常生活での全面的な否定です。それは、最近になつて世界中に知られたカソリック僧侶による性的な男児虐待の生まれる土壌です。勿論カストラートといふ子供の頃に去勢されて大人になつてもソプラノで歌ふ教会のための歌手といふ奇形も許すほどの性的禁圧である。

といふことから、結局、この地域に住むキリスト教徒にとつての性（セックス）の問題は、如何にキリスト教の教義から脱出し、これを否定して自らの男性と女性の命をそれぞれの性、各人の性のあり方に従つて救ふかといふことの歴史であつたといふことである。これが「性の解放」とか「セックス革命」とか、２０世紀の後半に言はれて、世界で流行したものの原因なのです。

そして、これが、要約に書いてある「１９世紀に入るまで、性行為は（セックス）は哲学的な観察に値しない不自然なる肉欲として見なされてゐた。やつと今世紀のここ数十年になつて、性行為が新しく、人間同士の意思疎通（コミュニケーション）の特別な形（方法）であるといふ発見をしたのだ」といふことの意味なのです。

といふことは、私たち日本人の歴史に鑑みれば、明治の御世になつて欧米白人種キリスト教との風俗に異なるからといふ理由で禁止される前までは、公衆浴場は男女混浴で湯浴みに秩序があつたといふ文化の方が遥かに上等な文化であり、高度に文化的な習俗であつたといふ事になります。なんとまあ、遅れた文明であらうかと思ふのである。結局、この人種から学んだのは、また学ぶべきであつたのは、物質科学と、これを応用するかまたは此に対抗して生まれた精神科学（日本でいふ人文科学）、そしてこの二つの科学の応用技術のみといふ生活の利便性に関する事になるのではないだらうか。

といふわけで、いつものやうに、引用する哲学者は次の６名である。

１。プラトン（西暦紀元前428/427-348/347）
２。教父アウグスティヌス（254-430）
３。カント（1724-1804）
４。ジャン・ポール・サルトル（1905-1980）
５。アメリカの哲学者ロバート・ソロモン（1942-2007）
６。その他の一般的な哲学者たち

１から６に従い上述のキリスト教の性行為の禁圧から性行為コミュニケーション（性行為意思疎通）積極肯定論までの歴史的な進展が語られてゐる。

カントも、この時代の常識にしたがつて、婚姻による性交（セックス）だけが道徳的であると考へたいふことである。カントによれば、”性的な自慰行為は、その固有の人間たるものを家畜の仲間に貶める扱い”とする事だといふことである。カントは一生独身であつたから、この哲学者は本物のカソリックの僧侶のやうに生きたといふことでせう。

さて、さうして、２０世紀の後半の「性革命（セックス革命）」に至つて、哲学者も漸くリラックスして（緊張せずに）性といふ主題を扱ふやうになつたといふのです。

ジャン・ポール・サルトルは性行為を”肉になること”と言つたとある。”肉になる”とは、サルトルによれば、”私たちが他人の肉体に一つになつて其れを我が物となす”事である。やはり、サルトルは性にあつてマルクス主義者であると思ふが、如何か。So What?だからなんだといふ問ひにサルトルは答へてゐない。それとも著者の引用が偏つてゐるか、ほんの一部だけの引用であるのかも知れない。こんな詰まらぬ性行為であるならば、この方面から云つても、私はマルクス主義は御免である。しかし、サルトルは更に隠喩（メタファ）を用ひて、”欲望のコミュニケーション”について語つたといふ。何か、してみれば、この「コミュニケーション」といふ言葉が、マルクス主義者か、もつと広く一般的に云ふ共産主義者には、伝家の宝刀の如く、万能薬かトランプのジョーカーの如くに思はれてゐるのであらう。それで、話し合はう、話せばわかるなどといふもののいひ方が流行して来た２０世紀後半であり今に至るのであつたのかと、さう思ふ。これが肉体といふことであれば、”さあ、まづ性交（sex）しよう”、”セックスすればわかる”といふことになつて、酷い話になる。アメリカのTV番組の連続物を見てゐると、虚構の話とは云へ現実の生活の意識と実感を写してゐるでせうから、本当にそんな感じがします。味もそつけもない。即物的過ぎて情感などといふものがないのだ。

アメリカの哲学者のソロモンによれば（果たしてアメリカに哲学者がゐるのかどうかは疑問であるがーこれは決してアメリカを貶める言葉ではない。彼らにはプラグマティズムといふ素晴らしい擬似（贋の）科学があるではないかー）、sexは”肉体言語”であるのだといふのだ。これまでのsexを私はむくつけき印象を避けるために性交とは訳さずに性行為とあへて訳して来たが、このアメリカ人の哲学者の此処で使ふsexは、これが肉体言語だといふのであれば、

もはや上品も下品もない、性交と訳すべきsexです。この御仁によれば、そのやうに考へる”性交とは、たとへば信頼や羞恥心や、相手を認めると云つたやうな感情と所作を表現するコミュニケーションの一種である”といふ。

これに続く次の一行を読むと、何故欧米白人種が「コミュニケーション」という言葉を好んで使ふかといふ理由が判ります。

「今日の哲学者たちは、性交をもはや道徳的な見地から観ることはしてゐない。」

即ち、ここでもやはり依然としてキリスト教の道徳観、即ち性行為そのものが悪であるといふ一般的な前提で、それが悪にならぬ場合（即ち結婚）を例外規定、除外規定として考へるといふ論理から離れ、これを否定して性行為を観るために、欧米の「今日の哲学者」たちは「コミュニケーション」という言葉を必要としてゐるといふ事です。即ち、「コミュニケーション」といふ用語を、反キリスト教といふ点で、逆に絶対善として考へてゐるといふことです。とすれば、困つた事に、これもまた彼らの世界ではイデオロギーになりかねないのです。

といふことは、もつと論を進めると、彼らの問題は、それが苦しみとしての感情であれ、思考の問題としての矛盾した論理であれ、いづれにせよ、唯一絶対神の存在を離れまたは否定した場合の普遍性をもつた生活道徳の根拠と、二項対立を超越する思考論理の根拠を２１世紀の今も尚見出すことができてないといふことです。この二項対立の間にある浮遊状態を虚無主義（ニヒリズム）と云ひます。【a】

私たち日本人の性道徳の前提は、性の全面的肯定ですから、私たちにはキリスト教のニヒリズムは無縁であり、性道徳についても論理が全く私たちとは正反対だといふ事に深く留意すべきです。この落差（差異）を弁（わきま）へて置かないと、幾ら彼らと「コミュニケーション」しても理解し合ふことが永遠にできません。

かうして読み進めて行きますと、次のやうな文を著者は書いてゐる。これこそが、マルクス主義であり、共産主義の怠惰の見本です。怠惰とは言ふことがどつちつかずだといふこと。

「性的な行為は、性的な行為であるといふ理由で、正しいとか間違つてゐるとかといふことではないのだ。」

ここに、上記【a】に文章を読みつつ私の予測して指摘したニヒリズムがあります。即ち、

AでもなくZでもないといふ二項対立の否定が、二項対立のそれぞれの否定だけにとどまつてゐて、それ以上考へる事をせずにゐて、問題を放置する。この各項個別否定の論理は、論理学上はdisjunctionと云ひ、否定和といふ論理で、足し算の否定ですから、個別バラバラに各項を否定するだけで物事の収集がつかない、問題を散らかすだけの理屈です。今の日本は、

お笑ひ国会議事堂から２０世紀一斉同報型ゾンビ・マスメディアまで、またネット言論に至るまで猖獗を極めてゐるのが、この論理です。さうであれば、このやうな順序で考へて参れば、今の日本には、否定和算が性道徳との関係で通俗化したニヒリズムとなつて蔓延してゐるといふ事ができます。それが典型的には新潮４５突然廃刊のLGBT事件です。このLGBTを声高に叫ぶ人たちは、性がそもそも否定されてゐるといふ前提で主張をしてゐるので話が文字通りにできないし、コミュニケーションが成り立たない。性を否定されてゐるといふ前提でものを考へれば、自分は被害者だといふ意識に陥るでせう。そして実際にその通り。

段々と２１世紀の今隠れてゐて社会的な現象として騒動を起こす幼稚な言動の下にある論理が否定和（disjunction）であり、心理としては被害者意識であること（即ち、自分が悪を為し罪があるので罰して欲しいといふ欲求の裏返し）が、この著者のお蔭で明らかになつて来ました。

さて、上の引用のすぐ後に続く最後の二行を読む事にします。果たして、このニヒリズムといふ問題解決の方法や如何に。

「しかし、私たちは性交によつて、他の人間を、傷つけたり、貶めたり、または道具のやうに使つたりする事ができる。この限りではカントが間違ひだといふことはできない。即ち、もし私たちが他人を単に”性交物体”または”性交客体”または”性交対象”として観るのであれば、私たちは、カントの言ふ人間の尊厳を軽視し、侮る事になるからだ。」

結局、性行為に於いて（著者の考へでは、性行為といふ言葉には性道徳といふ考へが既になく、従ひ性行為にも性道徳はないといふ事になるが、何故ならキリスト教の性道徳を否定する事によつてさうだから）、「人間の尊厳」といふ抽象概念を持ち出せば、それは哲学の領域で大いに議論をしたら良いが、具体的な性慾による性行為の問題としては問題の解決にはならはない。

果たして、性行為に道徳などあるのだらうか？

それが親密な関係にある場合、即ち個人的な関係にある場合には、道徳などはないだらう。もし道徳の本を書かうとしたら「四十八手」の教則本になるだらう。しかし、これが公共の場所のことであれば、性道徳が必要だといふことなのだらうか？と考へてみると、この問ひはやはり可笑しい。何故ならば、私たちは衆人環視の中で性行為はしないからである。

随分と以前にフランスの空港で乗り換へた日本人の目撃談で、自走ベルトの歩道の上で性行為に励んでゐるフランス人の男女をみて仰天したといふ記事を読んだことがある。その時は、フランス人ならやるだらうといふ感想を持つたが、今この記事を思ひだすと、恥を忘れれば、公共であれ道徳は失はれるといふこと、それは性道徳も道徳と呼ぶ以上同じだといふ事を示してゐると思ふ。

果たして、性行為に道徳などあるのだらうか？

そんな道徳などないのではないか？何故ならば、性そのものがeros（エロス）といふ生命の発露であるからには、もし性道徳があるとすれば、あのフランス人の男女の性的無道徳の正反対の論理を考へて此の論理と感情の教育を施し普及させる以外にはなく、この場合には、性道徳に限らず、道徳といふ事であれば、人間に恥の感覚を教へる事が道徳教育だといふ事になります。ですから、性（sex）そのものに原因を探し回答を求めるのは無意味だといふ事です。即ち性交と道徳は無関係で、本来にあつては、別のことだといふことです。

ここから先は、私が最近『二十世紀の文学』といふ安部公房と三島由紀夫の対談の冒頭の後者の発言、「性の問題だね、結局、二十世紀の文学は。」といふ言葉に触発されて着想した「生殖・排泄器官関係社会論仮説」といふ理論によつて、道徳や倫理やエロスや糞尿の関係と更に社会的な都市に関係する諸物諸施設の設計（たとへば公衆便所の設計）などについての説明をしたい誘惑にかられるが、この主題の範囲を逸脱するので、ここでは次に述べる程度に我慢をして、そろそろ本稿を終はりとしたい。

私たち安部公房の読者としては、『燃えつきた地図』の最後の場面で、何故透明な４面のガラスで構成される電話ボックスの中で恥も外聞もないほどに排便をした名も知らぬ人間の事を主人公は、それほどに孤独だと思ひ、用便する姿を想像して恐ろしくなつたのかといふ事を考へることです（全集第２１巻、３１０ページ上段）。

この恥を忘れざるを得ないほどに「都会という無限の迷路の中で、数え切れないほど存在しているはずの便器の中の、わずか一つの利用さえも許されなかった、孤独な男」の孤独な論理を反転させれば、性についても同様の孤独な人間の姿を思ひ描くことができるだらう。即ち、前者の人間に道徳がなければ、後者の男女にも道徳がないのである。従ひ、性行為を隠し秘するのは、道徳の有無の問題ではない。本居宣長が源氏物語を仏教の道徳で読むなといふことに同じ、古代的な、もつと根源的な理由に、この機微は、拠る。

あなたが本当に孤独になりたければ、愛する人と公衆の面前で性交することである。あのフランス人の男女のやうに。『砂の女』のあの村人たちが砂の穴の上から、砂の女との性行為を仁木順平にけしかけたやうに。『他人の顔』で主人公が密かにとおもつてゐた性行為が相手に最初から知られてゐたといふことのやうに。『密会』の最後の場面で仮面を被つた主人公の妻らしい女性がカーニバルの前夜祭、即ちカーニバルの幕の上がる「以前」の超越論的な時間と空間の存在する契機にペニスを二本持つ副院長の馬と衆人環視の擂り鉢底の舞台の上で性交するやうに。或いは『カンガルー・ノート』で賽の河原の子鬼たちに主人公が「トンボ眼鏡の看護婦」との自走ベッドの上での性行為を囃し立てられて促されるやうに。

ここに「生殖・排泄器官関係社会論仮説」の成立する契機がある。

あなたに考へてもらひたい、何故生殖器官と排泄器官（排尿器官）は形態としても部位としても同一であるのだらうか？

従ひ、或いは、何故『箱男』のショパン少年はピアノ教師の排泄を覗き見たのだらうか？それも鏡を使つて。或いは『方舟さくら丸』の主人公もぐらもまた地下の閉鎖空間の中でとは云へ、否、閉鎖空間の中であるからこそ孤独の中であるとは云へ、しかし、四囲の壁のない場所に（何でも飲み込む）便器を置いて排泄をし、あまつさへそこに跨（またが）りながら食事をしたり世界地図を広げて想像の中の自由な旅をしたりするのだらうか？

かうして考へて来ると、安部公房の文学の素晴らしさがよくわかる。間違ひなく、金儲けを考へ立身出世を少しでも考へる人間に、この文学を理解することはできない。何故なら、四壁を取り払つての生殖と排泄といふ行為は、公衆の中での金儲けと立身出世の対極にあるからである。［註１］此れが安部公房の否定の積算の論理（二進数では否定論理積）、即ちA+B=K（定数）をAxB=K'に変形する論理なのです［註２］。即ち、安部公房は社会を否定的に陰画として観てゐるとは、このことです。更にもつと云へば、安部公房が作品中の人間の在り方に「失踪前駆症状」とか「溶骨病」といつた病名をつけて呼ぶ事は、このやうに考へて来ると、何を意味してゐるかといふと、安部公房は人間と其の社会を病者と病院（病める者の集合施設）として観てゐること、否、同時に診てゐることを意味してゐます。これが、安部公房が最初精神科の医者になりたいと思つたことの理由と人間観察視点であり、これをそのまま活かして藝術家になつたといふことです。この安部公房像は、安部公房の世界を理解するためには大事です。さうであれば、何故医者や病院がよく出て来て話の舞台になるのかがわかります。

［註１］
このもぐらの感覚と論理については『もぐら感覚１５：便器』（もぐら通信第１３号）に詳しく論じたので、読んでほしい。もぐら通信第１３号のダウンロードは：https://docdro.id/bZ6PpUo

また、この感覚と論理とリルケの関係については、『共同体幻想を否定する文学』の「負け切った男リルケ」に戦時中の成城高校時代に何故、リルケを読んだのかといふ意義が語られてゐる。

「安部　そう、あのころのぼくは絶対への帰属というものを拒否してくれる思考に餓えていましたのでね。それで、ヤスパースにひどく傾倒し、そのヤスパースの延長として、リルケを心の支えにしたんだ。
　古林　満州と内地という環境の相違だったろうけど、ぼくなんかの場合にはヘッセやカロッサが比較的手にはいりやすかったというせいもあって、それを読みふけった記憶があるんですが、安部さんは彼らにはあまり興味がありませんでしたか。
　安部　結局、負けきったという状態が好きだったのだなあ、リルケのね。カロッサにしてもヘッセにしても、やっぱりどっかで勝っているでしょう。あの時代に、僕はもう勝っている人間が全部いやだったんだな。だから、負けこんだ男としてのリルケに惹かれたんだと思うね。ドストエフスキーの次にリルケが好きだった。」
（全集第２３巻、２９５ページ下段）（傍線引用者）

安部公房の最初の発言の傍線部の一行と二つ目の傍線部の一行は、そのまま、公衆と私の孤独および性行為と排泄行為の二つの一対の組み合わせの関係の、特に何故安部公房がリルケを読んだかの、説明になつてゐる。勿論、安部公房の此の発言によつて、ヤスパースといふ哲学者も、安部公房の読者にとつて読まれるべき哲学者の一人だといふ事になります。この原稿を書いてゐる時点で、私は未読です。

［註２］
「A+B=K（定数）をAxB=K'に変形する論理」と役者の在り方、即ち存在を演技指導する理論の根底にある人間（役者は役者である前に人間である其の）姿をニュートラルと名付けたのが、これです。この理論の詳細は、『安部公房の初期作品に頻出する「転身」といふ語について』（もぐら通信第５９号）の「VI　「転身」といふ語は、詩文散文統合後に、どのやうに変形したか（「③散文の世界での問題下降」後の小説）」にて詳説明しましたので、これをお読みください。

最後にもう一つ余計なことを付け加へれば、道徳といふ言葉を聞いて直ぐに思ふのは老子の『道徳経』です。この第１章に此の哲学者の思想の本質（エッセンス）が凝縮されてゐますが、続く其の応用編の最初の章である第２章は、谷の底を流れる一筋の川の水の話で、これは第１章で論じた道（タオ）の形象（イメージ）を語つたものです。谷とは勿論女性の秘所の凹、即ち存在の窪みであり、一筋の川の流れとは此れも勿論女性の愛液の隠喩（メタファ）です。かくして、私の道徳といふ概念の認識は、道徳の根底には、プラトンの描くソクラテスのいふ通りにeros（知りたいといふ根源的な思ひ）があり、これが肉体の男女の性愛の結合と交換（または交歓）から高度に抽象度の高い憧れ（これも知りたいといふ根源的な思ひ）である概念の結合と交換の世界、即ち言霊の産霊（むすび）の世界までを貫く棒の如き思ひがあるといふことなのです。何しろ老子の門には森羅万象が出たり入ったりするのですから、この言ひ方も赦されるでせう。老子曰く「玄の玄、衆妙の門なり。」玄の玄とは、存在の存在といふ意味です。１０代の安部公房は此れを存在自体と呼び、終生これになりたいと願つた（『中埜肇宛書簡第８信』（1946年12月23日付）、全集第１巻１８８ページ下段）。辛辣なもの言ひをする安部ねりさんから直接電話越しに聞いた言葉の語彙を其のまま使ふことは余りにも露骨ですから、私の言葉に直していへば、安部公房は非常に女性が好きでした。

即ち、エロス（eros）と性と哲学（形而上学）と精神と霊魂と肉体と「私の中の「私」」と現実と夢との関係の結合に関する説明は、賢者にあつては、古今東西を問はずに同じだといふことが、言ひたい。但し、唯物論者を除く。

リルケの『オルフェウスへのソネット』を読む
（４０）
第２部 XV
～安部公房をより深く理解するために～

岩田英哉

XV

O BRUNNEN-MUND, du gebender, du Mund,
der unerschöpflich Eines, Reines, spricht, —
du, vor des Wassers fließendem Gesicht,
marmorne Maske. Und im Hintergrund

der Aquädukte Herkunft. Weither an
Gräbern vorbei, vom Hang des Apennins
tragen sie dir dein Sagen zu, das dann
am schwarzen Altern deines Kinns

vorüberfällt in das Gefäß davor.
Dies ist das schlafend hingelegte Ohr,
das Marmorohr, in das du immer sprichst.

Ein Ohr der Erde. Nur mit sich allein
redet sie also. Schiebt ein Krug sich ein,
so scheint es ihr, daß du sie unterbrichst.

【散文訳】

おお、泉の口よ、お前与える者よ、お前、尽きることなく
一つのもの、純粋なものを話す者よ—
お前、水の、流れる顔の前の、大理石の仮面よ。そして、背景には

水道橋からの由来、由緒がある。ずっと遠くから来て墓場の傍らを過ぎ、
アペニン山脈の崖から、水道橋は、お前に、お前の伝説を運んで来るのだが、

その伝説は、次に、お前の顎の黒く歳をとることの傍を通り過ぎて、顎の前の
器の中へと落ちるのだ。これは、眠りながら差し出された耳、お前がいつも

話しをその中にする大理石の耳だ。

大地の耳。かくして、ただ自分自身とだけ、大地は話をする。もし壺が押し入ったら、大地が自分自身としてゐる話をお前が中断したと、耳には見えることだろう。

【解釈と鑑賞】

前のソネットの後半、即ち第3連と第4連の詩想を受け継いでいるのでしょう。これは、噴水の水流れ出る泉の口を巡るソネットです。

アペニン山脈から流れてくる水もオルフェウス、写真などでみるとよくイタリアなどの市場にある噴水などの水の装置についている、水の流れ出る口もオルフェウス、そして、その水を受ける器もオルフェウス。

この詩想は、次のソネットにQuelle、クヴェレ、源泉、泉として、やはり、受け継がれています。

【安部公房の読者のためのコメント】

水といふ存在の形象の永遠の尽きることのない天地の間の循環は、リルケの詩想の一つです。

安部公房ならば、これをtopologyの一筆書きで理解したと言へば、読者には理解されるでせう。或いはまた、この詩は、自然のこととして、自然の中のメビウスの環を歌つたと言へば、これも通じるでせう。同じ詩想を歌つた安部公房の詩が『無名詩集』にあります。それは、「祈り」といふ詩です。

祈り

神よ
せめて一本の　木の様であつて下さい
夕ともなれば
拡つて行く影と共に
宇宙の影に融けて行く
果樹園の実りの様であつて下さい
或ひは熱にうなされた額の上で
跡もなく消えて行く一ひらの
雪の様であつて下さい

僕達はあなたのまはりで
出来得れば
日々に耐え　影の動きに
移ろつて行く時の様でありませう
せめて限られた樹液の中で
音もなくいとなむ流れでありませう

しかし、この詩想は安部公房らしく、既に陰画としての循環になつてゐます。陰画のメビウスの環です。メビウスの環の接続線は「宇宙の影に融けて行く」。「或ひは（略）/跡もなく消えて行く」。このやうな接続として生きる「僕達はあなたのまはりで/（略）/日々に耐え　影の動きに/（略）/音もなくいとなむ流れであ」る。そして、このやうな祈りであれば、これは定例的に、また折節に、繰り返され、繰り返されるならば其れは呪文である。存在はどこにどのやうに招来されて出現するか。それは、

「一本の木の様」に、「果樹園の実りの様」に、「一ひらの/雪の様」に直喩（simili：シミリ）として存在は現れる。小説家に変貌した後にも依然として安部公房の愛用する譬喩（ひゆ）が直喩です［註１］。それでは現存在たる私はどこにどの様にゐるのか。私といふ祈り呪文を唱へるものは、「移ろって行く時の様」（直喩）に「せめて限られた樹液の中で/音もなくいとなむ流れ」（事実）である。

［註１］
安部公房の多用する直喩については『安部公房文学の毒について～安部公房の読者のための解毒剤～』（もぐら通信第５５号）の「１。直喩といふ毒（修辞の毒）」にて詳述しましたので、ご覧ください。

連載物・単発物次回以降予定一覧

（１）安部淺吉のエッセイ
（２）もぐら感覚２３：概念の古塔と問題下降
（３）存在の中での師、石川淳
（４）安部公房と成城高等学校（連載第８回）：成城高等学校の教授たち
（５）存在とは何か〜安部公房をより良く理解するために〜（連載第５回）：安部公房の汎神論的存在論
（６）安部公房文学サーカス論
（７）リルケの『形象詩集』を読む（連載第１５回）：『殉教の女たち』
（８）奉天の窓から日本の文化を眺める（６）：折り紙
（９）言葉の眼１２
（１０）安部公房の読者のための村上春樹論（下）
（１１）安部公房と寺山修司を論ずるための素描（４）
（１２）安部公房の作品論（作品別の論考）
（１３）安部公房のエッセイを読む（１）
（１４）安部公房の生け花論
（１５）奉天の窓から葛飾北斎の絵を眺める
（１６）安部公房の象徴学：「新象徴主義哲学」（「再帰哲学」）入門
（１７）安部公房の論理学〜冒頭共有と結末共有の論理について〜
（１８）バロックとは何か〜安部公房をより良くより深く理解するために〜
（１９）詩集『没我の地平』と詩集『無名詩集』〜安部公房の定立した問題とは何か〜
（２０）安部公房の詩を読む
（２１）「問題下降」論と新象徴主義哲学
（２２）安部公房の書簡を読む
（２３）安部公房の食卓
（２４）安部公房の存在の部屋とライプニッツのモナド論：窓のある部屋と窓のない部屋
（２５）安部公房の女性の読者のための超越論
（２６）安部公房全集未収録作品
（２７）安部公房と本居宣長の言語機能論
（２８）安部公房と源氏物語の物語論：仮説設定の文学
（２９）安部公房と近松門左衛門：安部公房と浄瑠璃の道行き
（３０）安部公房と古代の神々：伊弉冊伊弉諾の神と大国主命
（３１）安部公房と世阿弥の演技論：ニュートラルといふ概念と『花鏡』の演技論
（３２）リルケの『オルフェウスへのソネット』を読む
（３３）言語の再帰性とは何か〜安部公房をよりよく理解するために〜
（３４）安部公房のハイデッガー理解はどのやうなものか
（３５）安部公房のニーチェ理解はどのやうなものか
（３６）安部公房のマルクス主義理解はどのやうなものか
（３７）『さまざまな父』論〜何故父は「さまざま」なのか〜
（３８）『箱男』論 II：『箱男』をtopologyで解読する
（３９）安部公房の超越論で禅の公案集『無門関』を解く
（４０）語学が苦手だと自称し公言する安部公房が何故わざわざ翻訳したのか？：『写真屋と哲学者』と『ダム・ウエィター』
（４１）安部公房がリルケに学んだ「空白の論理」の日本語と日本文化上の意義について：大国主命や源氏物語の雲隠の巻または隠れるといふことについて
（４２）安部公房の超越論

（４３）安部公房とバロック哲学
①安部公房とデカルト：cogito ergo sum
②安部公房とライプニッツ：汎神論的存在論
③安部公房とジャック・デリダ：郵便的（postal）意思疎通と差異
④安部公房とジル・ドゥルーズ：襞といふ差異
⑤安部公房とハラルド・ヴァインリッヒ：バロックの話法
（４４）安部公房と高橋虫麻呂：偏奇な二人（strangers in the night）
（４５）安部公房とバロック文学
（４６）安部公房の記号論：《　》〈　〉（　）〔　〕「　」『　』「……」
（４７）安部公房とパスカル・キニャール：二十世紀のバロック小説（１）
（４８）安部公房とロブ＝グリエ：二十世紀のバロック小説（２）
（４９）『密会』論
（５０）安部公房とSF/FSと房公部安：SF文学バロック論
（５１）『方舟さくら丸』論
（５２）『カンガルー・ノート』論（済み）
（５３）『燃えつきた地図』と『幻想都市のトポロジー』：安部公房とロブ＝グリエ
（５４）言語とは何か II（済み）
（５５）エピチャム語文法（初級篇）
（５６）エピチャム語文法（中級篇）
（５７）エピチャム語文法（上級篇）
（５８）二十一世紀のバロック論
（５９）安部公房全集全３０巻読み方ガイドブック
（６０）安部公房なりきりマニュアル（初級篇）：小説とは何か
（６１）安部公房なりきりマニュアル（中級篇）：自分の小説を書いてみる
（６２）安部公房なりきりマニュアル（上級篇）：安部公房級の自分の小説を書く
（６３）安部公房とグノーシス派：天使・悪魔論～『悪魔ドゥベモウ』から『スプーン曲げの少年』まで
（６４）詩的な、余りに詩的な：安部公房と芥川龍之介の共有する小説観（済み）
（６５）安部公房の/と音楽：奉天の音楽会
（６６）『方舟さくら丸』の図像学（イコノロジー）
（６７）言語貨幣論：汎神論的存在論からみた貨幣の本質：貨幣とは何か？
（６８）言語経済形態論：汎神論的存在論からみた経済の本質：経済とは何か？
（６９）言語政治形態論：汎神論的存在論からみた政治の本質：政治とは何か？
（７０）Topologyで神道を読む（１）：祓詞と祝詞と結界のtopology
（７１）Topologyで神道を読む（２）：結び・畳み・包みのtopology

［シャーマン安部公房の神道講座：topologyで読み解く日本人の世界観］
（７１）超越論と神道（１）：言語と言霊
（７２）超越論と神道（２）：現存在（ダーザイン）と中今（なかいま）
（７３）超越論と神道（３）：topologyと産霊（むすひ）または結び
（７４）超越論と神道（４）：ニュートラルと御祓ひ（をはらひ）
（７５）超越論と神道（５）：呪文と祓ひ・鎮魂
（７６）超越論と神道（６）：存在（ザイン）と御成り
（７７）超越論と神道（７）：案内人と審神者（さには）
（７８）超越論と神道（８）：時間の断層と分け御霊（わけみたま）
（７９）超越論と神道（９）：中臣神道の祓詞（はらひことば）をtopologyで読み解く：
古神道の世界観
（８０）三島由紀夫の世界観と古神道・神道の世界観の類似と同一
（８１）安部公房の世界観と古神道・神道の世界観の類似と同一

（８２）『夢野乃鹿』論：三島由紀夫の「転身」と安部公房の「転身」
（８３）バロック小説としての『S・カルマ氏の犯罪』
（８４）安部公房とチョムスキー（済み）
（８５）三島由紀夫のドイツ文学講座
（８６）安部公房のドイツ文学講座
（８７）三島由紀夫のドイツ哲学講座
（８８）安部公房のドイツ哲学講座
（８９）火星人特派員日本見聞録
（９０）超越論（汎神論的存在論）で縄文時代を読み解く
（９１）「『使者』vs.『人間そっくり』」論

編集後記

●荒巻義雄詩集『骸骨半島』を読む（１５）：霞論哲学：霞もまた、よく思案すれば、液体にして遍在し拡がり行かむ。絶えず変化する差異である時間の此の形象化による問題の解決は素晴らしいと思ひます。問答無用。といふ趣がある。脱帽です。安部公房ならば『洪水』『水中都市』『第四間氷期』といふ作品に相当します。●『周辺飛行』論（１０）：３。『周辺飛行』について（５）：睡眠誘導術―周辺飛行７：騎兵隊の一列が崖にある存在の穴の中に入ることを妨げることが入眠の契機になるといふ話です。即ち生きてゐることが最初から夢をみてゐることだといふ論理です。安部公房らしいが、勿論安部公房の専売特許ではない。古今東西哲人、賢人、思想家、賢者はみなかくいふやうである。●何故安部公房は１９７３年（昭和４８年）に『無名詩集』を巡る対談を自ら企画したか～『鏡子の家』の絶望と『無名詩集』の絶望～：これは最初此の対談を読んだときから可笑しいと思ひ、きつとさうに違ひないと思つてゐたことが、三島由紀夫との関係で読み解くことができました。しかし此の古林尚といふ人は優れたインタヴュアーで質問が鋭い。三島由紀夫の死の直前にもインタヴューをしてゐて、やはり同様に鋭いやりとりを故人としてゐます。１９７０年から安部公房スタジオの旗揚げ公演までの１９７３年の間の安部公房の活躍は獅子奮迅といふ感じがします。よくやつたものです。　●安部公房　過去のない未来人間：昭和五十二年（１９７７年）『別冊１億人の昭和史　昭和文学作家史　芥川賞・直木賞受賞作家全名鑑』：これは全集第３０巻に言及のみあるものの転載です。それにしても上田三四二さんの安部公房文学理解の正鵠を射てゐることに驚く。此の論はやはり安部公房前衛論に分類される論でありませう。●哲学の問題１０１：性（セックス）：やれやれ、欧米人に生まれなくてよかつた、日本人に生まれてよかつたと思ひました。キリスト教から哲学が、哲学から物質科学が生まれたので、後二者の学問的（科学的）な成果はどうあれ、やはりキリスト教といふ一神教は誠に恐ろしい。一体人間の生命を全否定してどうするつもりだ。目を覚ませ、日本人！といひたい思ひです。なぜなら此のキリスト教がヘーゲルとマルクスを産み、通俗化して共産主義となり今や更に通俗化して金融資本主義や性やその他政治と文化の領域で名前を変へてグローバリズムと化して呼ばれて猛威を振るつてゐるからです。●リルケの『オルフェウスへのソネット』を読む（４０）：第２部 XV：”おお、泉の口よ、お前与える者よ、お前、尽きることなく”：此の詩は平易でもあり、形象も豊かで、オルフェウスへのソネットの中で私の好きな詩の一つです。安部公房がもし哲学的、数学的に読んだらどう読むかといふ一例を示しましたが、勿論解釈は他にもあるでせう。私が伝へたかつたことは、安部公房の詩は、リルケの詩同様に、叙情性があつてもただ叙情的に読んではならないといふことです。これは詩文と云へば和歌である我が国の伝統の埒外にある詩文ですから、これをよくよく弁へないと、結局１５０年かけたが、何も彼の地の文明と文化が理解できなかつたといふことになりかねない。我が身のほどをまづは知るべし、知るべし、日本の国のことを、日本語のことを。英語を学ぶ暇があらばこそ。●では、また次号。

次号の原稿締切は超越論的にありません。いつでもご寄稿をお待ちしています。

差出人:
贋安部公房
〒182-0003東京都調布市若葉町「閉ざされた無限」

次号の予告

1。『周辺飛行』論（１０）
2。荒巻義雄詩集『骸骨半島』を読む（１６）：神の三角函数
3。安部公房の縄文紀元論（１）：一般論
4。私の本棚：西尾幹二著『あなたは自由か』を読む～自由と奴隷について～
5。哲学の問題１０１（１０）：愛
6。大久保房雄を読む（１）
7。リルケの『オルフェウスへのソネット』を読む（４０）
8。Mole Hole Letter（１３）：詩人は刑務所に入らなければならない

【本誌の主な献呈送付先】

本誌の趣旨を広く各界にご理解いただくために、 安部公房縁りの方、有識者の方などに僭越ながら 本誌をお届けしました。ご高覧いただけるとありがたく存じます。（順不同）

近藤一弥様、池田龍雄様、中田耕治様、宮西忠正様（新潮社）、北川幹雄様、冨澤祥郎様（新潮社）、加藤弘一様、平野啓一郎様、巽孝之様、鳥羽耕史様、友田義行様、内藤由直様、番場寛様、田中裕之様、中野和典様、坂堅太様、ヤマザキマリ様、小島秀夫様、頭木弘樹様、 高旗浩志様、島田雅彦様、円城塔様、赤田康和様（朝日新聞社）、富田武子様（岩波書店）、待田晋哉様（読売新聞社）

【もぐら通信の収蔵機関】

国立国会図書館、「何處にも無い圖書館」

【もぐら通信の編集方針】

１．もぐら通信は、安部公房ファンの参集と交歓の場を提供し、その手助けや下働きをすることを通して、そこに喜びを見出すものです。
２．もぐら通信は、安部公房という人間とその思想及びその作品の意義と価値を広く知ってもらうように努め、その共有を喜びとするものです。
３．もぐら通信は、安部公房に関する新しい知見の発見に努め、それを広く紹介し、その共有を喜びとするものです。
４．編集子自身が楽しんで、遊び心を以て、もぐら通信の編集及び発行を行うものです。